人文会 NEWS

2013.10
no. 116

代表幹事挨拶……田﨑洋幸 1
―書店現場から―
取次販売会社との販売契約について
そして、あゆみBooksの人文書販売の考え方について…鈴木孝信 2
―編集者が語るこの叢書・このシリーズ―
❶白水iクラシックスは「異端」で「不評判」？…竹園公一朗 10
❷人文書と平凡社ライブラリー……保科孝夫 16
東京女子大学図書館における学習支援の取組と丸山眞男文庫…橋本春美 21
人文会活動報告
人文会年次総会報告
委員会活動方針
2013年特約店グループ訪問報告
人文会会長退任のご挨拶……菊池明郎 51

寄稿・INTERVIEW

http://www.jinbunkai.com

●ありのままの光景が暗示するフクシマの〈未来〉

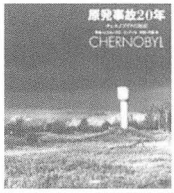
原発事故20年

チェルノブイリの現在

ピエルパオロ・ミッティカ▼著
児島修▼訳

史上最悪の事故から四半世紀後の現実を静かに物語る写真群。日本人にとっての未知の世界の全貌が明らかとなる。

B5判変型240頁・3150円



柏書房　東京都文京区本郷 2-15-13
Tel.03-3830-1891〈価格税込〉

赤ペン片手にあなたがチェック！増刷出来

赤ペンチェック 自民党憲法改正草案

伊藤真著

条文毎に「改正草案」と「現行憲法」を対比させ、改正部分を赤字で表示。チェック問題で重要部分を示し、改正理由、問題点を解説。A5判・1050円

繰り返される「暴言」を全面批判・増刷出来

「慰安婦」バッシングを越えて

「河野談話」と日本の責任

西野瑠美子他責任編集　「強制連行否定」論など、近年高まる右翼的傾向。「慰安婦」問題の解決に向けて、日本が今なべきことを示す。　46判・2310円

東京文京 本郷2-11 大月書店 電話03—3813-4651
メールマガジン配信中（詳細はHPで）税込

発売即重版！

革命的理論の誕生

流れとかたち

万物のデザインを決める新たな物理法則

生物・無生物を問わず、すべてはより良く流れるかたちに進化する！　ダーウィン、ドーキンス、プリゴジンらに異を唱える鬼才が放つ新理論。分野を超えて論争を巻き起こす衝撃の書。　◆2415円

エイドリアン・ベジャン、J・ペダー・ゼイン
柴田裕之訳　木村繁男解説

紀伊國屋書店
出版部：東京都目黒区下目黒 3-7-10
営業 TEL03(6910)0519　表示価は税込
http://www.kinokuniya.co.jp/

天皇の短歌は何を語るのか

内野光子著

天皇の短歌に政治的メッセージが潜んでいる。昭和天皇の短歌と戦後政治史との関係を問う。三九九〇円

ジモトを歩く

川端浩平 著

——身近な世界のエスノグラフィ

〈ジモト〉はどこに消えたのか。東日本大震災以降の地域社会を問い直す。二九四〇円

歴史として、記憶として

——「社会運動史」一九七〇～一九八五

喜安朗・北原敦・岡本充弘・谷川稔 編

雑誌『社会運動史』を刊行したメンバーのその後。五〇四〇円

「法」における「主体」の問題

【叢書アレテイア15】

仲正昌樹編

近代の正義論や法理論は、二重の「主体」を前提として成り立っている。五〇四〇円

御茶の水書房
東京都文京区本郷5-30-20 TEL 03-5684-0751
http://www.ochanomizushobo.co.jp

代表幹事挨拶

みすず書房　田﨑洋幸

二〇一三年五月一七日に行われた人文会年次総会において、代表幹事に再任されました。書記幹事の新保卓夫氏（誠信書房）、会計幹事の平石修氏（御茶の水書房）も再任となり、委員会構成も変更はありません。〈販売・企画〉・〈調査・研修〉・〈広報〉の三委員会制を継続することになり、〈販売・企画〉委員会委員長の朝倉哲哉氏（日本評論社）、〈調査・研修〉委員会委員長の橋元博樹氏（東京大学出版会）には引き続き、重責を担って頂くことになりました。〈広報〉委員会委員長には大野友寛氏（慶應義塾大学出版会）に代わり、根井浩一氏（平凡社）が就任しました。また、慶應義塾大学出版会、勁草書房、ミネルヴァ書房の三社が会員を交代しました。

今年の一二月、人文会は創立四五周年を迎えます。長きに渡って活動を継続することが出来るのも、先達が築き上げた信頼と実績、および現会員社の努力にほかなりません。今後も気を緩めることなく、人文書の販売と普及のために、会員各社で力を合わせ、書店および販売会社のご担当者のお役にたてる団体として評価頂ける活動を行って参ります。

なお記念行事として、人文会ニュース特別号の発行、研修会の実施、ホームページのリニューアルなどを行う予定です。引き続き、人文会、および会員各社をどうぞよろしくお願い申し上げます。

取次販売会社との販売契約について そして、あゆみBooksの人文書販売の考え方について

寄稿・INTERVIEW　鈴木孝信さん（あゆみBooks代表取締役社長）

今回人文会より、前回115号で日販・トーハンからの目標施策の回答が寄せられたので、それに対して書店の立場としてどう思うのかというような話を戴いた。主にいま取り組んでいるのは日販のパートナーズ契約であるので、それに添って書かせていただこうと思う。

25％の返品率が達成できれば、最終的には30％の書店マージンが実現できる。それが日販の目標である。実際は前年の返品率を基準値として、それから何ポイントでも減少すればインセンティブが得られる仕組みだ。当然ある数字の枠を超えて返品が多くなれば逆にペナルティが発生してしまう。30％のマージンが確保できれば書店経営は今より遥かに健全になるのは明らかで、30％はこれからの書店が存続していくためには必要不可欠な数字である。このことに反対する理由は全くみつからない。

さてここで問題は三点ある。一点目は25％の返品率を達成することがはたして可能なのかということ。二点目は返品率を重視するあまり、少量多品種という書店業態の良き特性を失い、それは連動して出版社の自由闊達で豊かな本の数々が生まれることを阻害する状態を招き、結果、市場が重層的で豊穣な世界から痩せた土壌にならないだろうか。或いは小さな出版社が良質な本を出しにくい環境になってしまうのではないかという危惧だ。さらに三点目は書店が25％の返品率を目標にすることと同様に出版社にもそれが求められると推測するならば、そのことに

より出版の点数、刷り部数が制約を受け、経営上懸念される事態が生じるのでないかということである。

それではまず、一点目の25％の返品率を達成することが可能かの問題についてみてみよう。書店は何をおいても正確に仕入れをすることが全てである。これは大変な作業であり、データと勘と読みに全神経を集中させなければならない難しい仕事だ。それに加え返品率を抑えるということは余計な仕入れをすることができないということを意味し、それは売れ損じを生じさせてしまう可能性も孕むということにもなる。考えただけで気が遠くなるような心持ちになる。しかし、低返品率を達成するしかこの厳しい現状から脱するのは難しいと考えて、社員全員が自分の問題として取り組むしかないのではないかと思う。

さて、返品率を論じるとき、取次からの配本の問題を避けて通ることはできない。配本制度の中で需要と供給のバランスが必ずしも正確になっていない点だ。すべてを注文制にすれば、かなり解決できるだろうが、書店・出版社共に手間がかかりすぎて対応ができない。配本のシステムは曖昧なところもあるが、現状では最良のシステムだと考えるしかない。しかし配本からもそれなりの返品が出ているのも事実だ。出版社が需要に対し予測を誤れば、即返品過多になる。最近では初刷の部数を慎重に設定しているようなので、返品は減少しているのかもしれない。しかし少なくない出版社がその予測を誤った場合、集積するとかなりの返品が生じることになる。さらに返品率がなかなか下がらないのは多く売れる本が少なくなっているのも原因の一つかと考えられる。書店は一タイトルで多く売れる本が少なくなれば、当然売るために売れる本を探す。様々な模索をし、知識・情報・経験をもとに平積み、面陳、棚を変え展開する。結果、熱心な社員ほど返品率を上げてしまう。正直、現場にいて思うことは、出版社には言いづらいことだが、売れない本が多くなっているのではと感じる。当然出版点数、刷部数は慎重にはかられていると思う。しかし、早期に店頭から消えてゆく本のいかに多いことか。出版社はどんな本を出すのか、どんな読者需要があるのか、さらに吟味し丁寧な本づくりをして欲しい。そうすれば返品は必ず減少する。

二点目の豊かな商品量の維持の問題と、小さな出版社

の良質な本が出にくい環境を危惧するという問題に関しては実を言うと正直楽観視している。出版社は今まで通り、自社の個性を発揮して得意なものを出版するであろうし、それは魅力ある本を出し続ける努力を惜しまないということだ。その努力をしなければパートナーズ契約などとは関係なく経営は行き詰まってしまうであろう。

三点目の日販と出版社のパートナーズ契約だが、出版社のことは門外漢で正直承知していない。供給過多になっている出版社もあるのではないかと思われる。いつの頃だか相当な返品の数値が明らかになり、改善していかなければ立ち行かなくなるという危機感が日販にあったのだと思う。日販が自社の送品・返品ロスを少なくし、利益をきちんと確保したいというのは経営上当然のことだ。その利益の一部を書店と出版社に還元し、少しでも将来に繋げようとしているのは、電子書籍が徐々に普及しはじめた現時点では良い施策であり、出版社にとっても悪いことではないと思う。

出版社は今や電子書籍に参入しているのに対し書店はまだ電子書籍に対し有効な手段を持っていない。出版社は本以外にも電子書籍事業での経営戦略も視野に入っているだろう。多分、本の市場はすこしずつ減少しながらも電子書籍と共存していくことになる。現在そういう過渡期にあるからこそ、出版社・取次・書店とともにスモール・イズ・ビューティフルの精神、考え方で出版物を厳選し返品ロスを抑え、縮小しながらも成長することが必要ではないかと思っている。

結論として私の意見は、日販のパートナーズ契約の考え方に関しては概ね賛成である。

さて、ここまででは人文会の平凡社の根井氏との約束の原稿枚数に不足してしまっているため、以下に弊社あゆみBooksの考える人文書販売について氏と対談した内容を付け加えた。

〈あゆみBooksの人文書販売の取り組み〉

聞き手　根井浩一（平凡社）

あゆみBooksチェーンは、東京・豊島区に本拠を持ち、東京都に10店舗、埼玉県に1店舗、神奈川県に

1店舗、それに仙台市に3店舗の合計15店舗で展開している。ロケーションは駅前、商店街、オフィス街の路面店が基本。広さは２００坪位まで。貴方があゆみＢｏｏｋｓの店舗に入れば「これがあゆみＢｏｏｋｓ・スタイルなのか」と感じることだろう。町の本屋さんの親しみやすい顔付きをしているのだけど、思わず目を引かずにいられない新刊の面陳列や、ぐっとそそられる平積みの表情があゆみブックスの持ち味だ。ここに至るまでには、スタッフの相当な苦労と工夫があったはずである。そしてそれらは今、確かな経験と自信につながっているのだと感じる。それも棚を相手に数十年のベテランプレイヤー、鈴木社長のイニシアティブと彼への信頼があってのことだ。それでは〝鈴木メソッド〟とはどのようなものなのか。私たちは人文会なので、とりわけ「人文書販売」に力点をおいて話を伺った。

――世間では１０００坪規模などのメガ店の出店が多くある一方であゆみＢｏｏｋｓの店舗は町なかの立地でせいぜい２００坪くらいまで。この広さをどうお考えなのでしょうか？　それとこの広さでの人文書の展開について教えてください。

本と雑誌のみの場合、70坪でやることができるというのが私の考えです。通路スペースを確保し、満足できる品揃えを棚で展開するための最低の広さです。これが１００坪になると違う商材の併設という考え方もあると思います。それはお客さんが喜ぶような商品、生活用品、器、民芸ものだとか。当然カフェの併設（自分達でやる）もあります。いずれにせよ70坪から１００坪あれば人文書を視野に入れた店作りはできます。このとき人文書の棚は8本とします。思想・哲学で1本、社会2本、心理1本、歴史＋文化人類学2本、宗教2本で表現します。

――あゆみＢｏｏｋｓで新規に店舗を立ち上げるとき、何を方針とされますか？　その際とりわけ人文書の仕入れはどのようにしていますか？

「まず売れる本を入れる！　その次に個性を導入する。しかし、結果がダメだったら縮め、置けるようだったら

伸ばす判断をする。そのための時間は2年間」これが方針です。自分の作っている棚が正しいかどうかのジャッジは誰がするのか？　それはお客さんです。自分の価値観を、お客さんだったらどう考えるだろうかと置き換えてみるのです。反応が芳しくなければ、お客さんはその棚を支持していないということです。再度手をかけていくしかありません。人文書についても売れ行き良好書を集めるのが基本。まず人文会の『人文書のすすめ』と日販の基本書から選択します。ところが、入荷した本の奥付を見ると、これが基本書なのかというものが少なくない。重版履歴がないし、顔付きを見ても、とうていこの本が売れていくとは思えない。それで次にあゆみＢｏｏｋｓの既存店の人文書販売データをみます。さらに直接版元に聞くことも多い。

――では、あらためて鈴木さんが品揃えの基準とするところは何ですか？

既刊書であれば、その本の信頼性を審査するために真っ先に奥付を見ます。奥付は本の通信簿。地味だけど永く読みつがれている本は版を重ね、読者の信頼を勝ち得ています。重版数が多いものは信用できます。新刊については、一にちゃんとした著者であるか、著者はこれまでどのような仕事をしてきたのか。二にその本が現在興味をもたれる内容なのか、社員にはこれらの選別をしっかりやってください、と言っています。そして気になる新刊をあげてもらい、それを全店舗にフィードバックしています。そのことにより、社員の現状の仕事のレベルがわかり、店長が指導する点も明確になります。また社員一人ひとりが「あの人はここまで理解できている、読めている」と感じ、励みにもなるかと考えています。人文書に限りませんが新刊書だけで売り場を活性化することは困難です。基本は既刊書だと思います。先に言ったように「売れている、版を重ねている」という事実だけは曖昧ではないからです。小さな出版社でも版を地道に重ねている本をあゆみＢｏｏｋｓは疎かにせず大切にしたいと思います。

――また、棚作りをしていく際、巷間よく言われる〝文脈棚〟をどう思われますか？

本と本との文脈を読み、棚を編集することについては否定するものではありません。しかし正確さ(この場合学術的なというより売るための正確性)、客観性があるかどうかの疑問もあります。棚を管理する者の主観や感性がそこには入り込むだろうし、そうして作られた棚には色がつく場合もあります。できるだけ、お客さんが棚を見ながら自然に感じ、流れていく感じがいいように思います。〝文脈棚〟について、誤解を恐れずにいうのならば押しつけになりはしないか？　ということです。

――さて、いま人文書は売れていますか？

人文書が売れない、などということはありません。80年代のニューアカデミズムブームとはいかないけれど、たとえば哲学・思想のジャンルは若い読者に取り込まれ、盛り上がっている現実もあります。あゆみＢｏｏｋｓが生き残るために大事なのは人文系、芸術系の書籍の充実です。ハードカバーだけが人文書ではなく、それらが文庫化したものもよい。文庫は電子書籍対策の最良の商品です。それは人文・芸術だけではなくクオリティの高い趣味、生活本も同じこと。センスのある生活を思う女性たちに向けた内容で文庫にも及ぶ書籍群です。私はこれを「装う」ジャンルとし、売上の一つの柱に位置付けています。話を人文書に戻すと、我々が今を生きる社会において、思想・社会・ライフスタイルを引っ張っていく著者が必ずいて彼らは若い人の注目と支持を集めています。たとえば「思想地図β」や太田出版の「ａｔプラス」、青土社の「現代思想」「ユリイカ」、講談社「Ｇ２」「ＲＡＴＩＯ」、新潮社「考える人」等で発言している人、さらにその人の周りの人など。彼らへの共感のメッセージがＳＮＳ(ツイッターやフェイスブック)を駆け巡っている。そこにアンテナを張っている読者が書店の棚に注目しているともいえます。それら思想界が恰好いいと感じる感度のよい読者が棚についていると思う。

――鈴木さんが出版社にいいたいことを聞かせてください

丁寧に本を作っていただきたい。クオリティの高い、良質な本を。それをいずれ文庫に落としてさらに読者を広げていって欲しい。そのときの文庫はハードカバーで

実績のあるものでなければならないと思いますが、それとは別に惜しくもハードカバーは無くなってしまったが、文庫で復活してくれてよかったというものでなければと思うのです。多くのお客さんの需要がある文庫、ますます成長株にならなければいけない文庫、失敗は出来るだけ避けて欲しいですね。

――続けて鈴木さんが人文会に言いたいことをお聞かせください

我々書店は圧倒的に人の手が不足していて残念なことに細かいところまで目を行き届かせることができないでいます。だから、「(流動的でしょうが)今何が基本図書なのか」「今、何が人文書でトレンドなのか」「その関連書は何なのか」「その一見目立たない本は何刷しているのか」というあたりの情報は人文会の方からも提案して欲しい。また、人文会会員社のものだけではなく、良質な書物を出版している他の版元の情報も提供して欲しいと考えます。たとえば、『人文書のすすめ』のような、巻末に書籍リスト付きのガイドブックを発行してきていますが、その改訂版などがあると良い。改訂版を今後出す予定があれば、最新の刷部数、年度、日付を必ず記して欲しい。そうであれば、もっと書店のオープン時の品揃えに、また日常棚を変える為に有効に使える本屋の教本になります。また、『人文会ニュース』でこの間特集していた「15分で読む仏教心理学」のようにキーブックを文中で紹介しているものは有益です。これはいろいろなジャンルでやってこられていますが参考にさせてもらっています。

インタビューは8月のゲリラ豪雨が東京・杉並区を襲ったとある夕刻、中央線沿線の某所で行われた。鈴木氏はこの春、あゆみＢｏｏｋｓの代表取締役社長に就任した。しかし社長になった今でも店舗の棚をできる限り見て回っている。〇〇社の〇〇という本は4刷、〇〇は10刷もしている。〇×社は小さい版元だが出す本はとてもシャープだ、と具体的な名前がポンポン出てくるのは現場を知らなくしては出てこない内容だ。この日、鈴木さんは『人文書のすすめ』と文春新書の『東大教師が新入生にすすめる本1・2』を持参していたが、その本

は手垢で黒くなるほど読み込まれ、付箋がびっしりと貼られていた。しかし鈴木さんは言っていた。「書店員は日々の新刊の多さに追われ自分を見失っているのかもしれない。落ち着いて、立ち止まって本を吟味する暇がなく、本当に売りたいものを見逃してしまっている。新刊が必ずしも売れない中、既刊本の見直しが必要です」。

インタビューの間、激しい雨音と雷鳴は、ときどき鈴木さんの言葉を聞き取りにくくさせた。しかし夜も更け、外に出ると嵐はすっかり去っていた。我々のいる書店・出版業界にもくっきりと晴れ渡る日がきっとくるだろう。そんな予感を抱くことができたインタビューだった。

２０１３年8月12日　西荻窪にて

白水・iクラシックスは「異端」で「不評判」？

竹園公一朗（白水社 編集部）

二〇〇四年に亡くなられた歴史家の網野善彦さんは『日本の歴史をよみなおす（全）』（ちくま学芸文庫）という本の中で、今日の出版界を考える上でも非常に興味深い指摘をされています。

文明史的大転換期だった南北朝の動乱期から室町時代にかけて、史料としての文書の数は極めて増えるのですが、他方で、鎌倉時代以前に比べると文字に品がなくなり、大変読みづらくなるのだそうです。

既刊本が振るわず、新刊点数が増え続けているとされる自分の業界のことを思うと、この指摘は重く響いてきます。

網野さんは、鎌倉時代までの「みやびた」文体が後景に退き、文字に対する畏敬の念が消えてゆく背景として、文字の実用化という社会的要請を挙げておられますが、出版界に巣食う「新刊依存」を読者や社会の要請とは受け止めたくはありません。また、こうして日々忙しなく造り出されてくる新刊がすべて「みやびた」と胸を張れるものなのか、一出版社員として危機感も覚えます。

より大きくメディアという観点からみても、ソーシャル・メディアが一様にコミュニケーションを蔽い、誰でも自由に発信できる環境が整った反面、まさに網野さんの指摘した歴史的事実が現在進行形で顕在化しており、「転換期」を肌で感じざるを得ません。

ところで、小社では、二〇一二年四月から新たな叢書、白水・iクラシックスをスタートさせました。ここでは出版界の現状を踏まえて、この叢書が刊行される「社会的要請」について、やや大袈裟ですが書いてみたいと思います。

「異端」の系譜

小社の名前を聞いてまず思い浮かべるのは海外小説でしょう。サリンジャー『ライ麦畑でつかまえて』(野崎孝訳)は言うまでもなく、つい最近でもメディアで「事件」などと囃されたボラーニョ『2666』(野谷文昭他訳)が刊行されるなど、この分野では戦後一貫して読者の記憶に残る作品を送り出してきました。

一方、毎年発行される白水社ブックカタログを見ていただければ分かる通り、哲学・思想という分野も小社の核になっています。

思想家の名を冠したものだけでも、アラン著作集全十巻、ベルジャーエフ著作集全八巻、キルケゴール著作集全二十一巻、ベルグソン全集全九巻、ルカーチ著作集全十三巻、オルテガ著作集全八巻、ショーペンハウアー全集全十四巻、デカルト著作集全四巻、バクーニン著作集全六巻、シェーラー著作集全十五巻、ジンメル著作集全十二巻、ルソー全集全十四巻、ティリッヒ著作集全十一巻、ニーチェ全集第Ⅰ期全十二巻・第Ⅱ期全十二巻、メナール版パスカル全集全六巻、新訳ベルクソン全集全七巻(刊行中)など、挙げればキリがありません。

一九六〇年代以降、本格的に刊行され始めた著作集・全集の傾向を一言でいえば、決してメーンストリームに位置付けられることがなかった、いわゆる「異端」を重視していたということが言えます。これは著作集ではありませんが、教条的マルクス主義から異端視されながら、独自の地平を切り拓いたブロッホの一連の著作の刊行(『希望の原理』全三巻=後出、『ユートピアの精神』好村冨士彦訳、『ルネサンスの哲学』古川千家・原千史訳)は、その精華だったと思います。

今から振り返ってみると、巻数も多くどれも大部な本を次々と呑み込んでいった社会にただただ驚嘆するばかりです。会社の倉庫で埃まみれになって眠るこれらの原本を手に取るとき、正直、往時への感慨を禁じ得ません。こうした書目の中から比較的頁数が少ないものは新書判の白水uブックスに移行させ、アラン『幸福論』(串田孫一・中村雄二郎訳、辻邦生解説)やベルクソン『時間と自由』(平井啓之訳、加藤典洋解説)、ルソー『社会契約論』(作田啓一訳、川出良枝解説)など、ハンディな古典として版を重

ねています。一方、大半は新書判という枠に収まり切らないボリュームで、定評ある作品群が次第に読者の視界から消えていくことになりました。

新装版ではなく！

白水iクラシックスは、こうした遺産を四六判並製という枠組みで活かす術はないのかというところから検討が始まりました。もちろん、かつて刊行されたものをそのまま出したのではただの新装版にすぎません。また、いくら版を重ねてきたとはいえ、刊行からあまりもの年月が経過しています。

国内外のアカデミズムの新たな展開の中で「読み方」が劇的に変わってしまったり、時代の変化とともに問題関心も地滑り的に移行したことに加えて、そもそも日本語がこの数十年で大きく変化しました。

しかしだからといって、「時代遅れ」の古典として簡単に退けるのはあまりに性急です。これらの本が世に出た時代、メディアとして出版が担っていた役割は、恐らく現在とは比較にならないほど切実なものがあり、それこそ網野さんの著書から言葉を借りれば、時代や社会と緊張感を持って刊行された一冊一冊はまさに文字への畏敬の念に溢れた「みやびた」ものだったと言えます。

こうした点から▼訳語の徹底的な見直し▼時代を意識したテーマ別構成▼第一人者による最新解説――を編集方針に据えて、刊行を始めることにしました。

これまでにルソー・コレクション全四巻『起源』『文明』『政治』『孤独』（遅塚忠躬・永見文雄他訳、川出良枝選・解説）、シェーラー『宇宙における人間の地位』（亀井裕・山本達訳、木田元解説）、ヘーゲル『キリスト教の精神とその運命』（細谷貞雄・岡崎英輔訳、長谷川宏解説）、アラン『哲学講義』（中村雄二郎訳、前田英樹解説）、ブロッホ『希望の原理』全六巻（山下肇・片岡啓治・石丸昭二他訳、柄谷行人・宇野重規・保坂和夫解説）と、立て続けに世に送り出しています。

具体的に編集方針がどう反映されたか、ルソー・コレクションを例にいくつか挙げてみましょう。

例えば、『政治』や『孤独』といった巻が典型的ですが、中身はほぼ「新訳」と言っていいほど瑞々しく生まれ変わっています。また従来「政治経済論」「コルシカ憲法草案」として知られた論考は、研究史の成果を考慮

して、それぞれ標題自体を「政治経済論(統治論)」「コルシカ国制案」に改める根本的改変を行ないました。さらに、今ルソーを読み直すという視点から大きくテーマを四つ(「起源」「文明」「政治」「孤独」)に絞った上で、ルソーのリスボン地震論と言っていい「ヴォルテール氏への手紙」を収録した点も特筆されます(『文明』)。

こうして出発した白水iクラシックスですが、刊行の大きな柱として、本邦初訳・新訳の投入による叢書全体の活性化も掲げています。

「現代思想」以後の模索

編集部として当初から危惧していたのは、白水iクラシックスが新装版の寄せ集めと受け流されてしまうことです。この危惧は今も解消されたわけではありません。インターネットで検索をかけてみると、「白水が新装版たくさん出してる」「解説だけ読みたいけど買う価値ある?」などという編集サイドからみると、大変悲しい書き込みが散見されます。

もちろん、こうした反応は折り込み済みではありました。新しい試みとしての白水iクラシックスをいかに読者に理解していただくか? 編集部の答えは本邦初訳・新訳をこの叢書で刊行していくことでした。

それでは、これまでの小社の読者を意識しつつ、さらにその裾野を広げていくにはいかなる書目が適当なのか? 確信が持てない中、ヒントになったのは最近若手が相次いで台頭している十九世紀フランス思想史という分野です。

かつて猫も杓子も現代思想という時代がありましたが、その影響力も翳り、新たな思想地図が模索されています。こうした流れの中で、現代思想に違和感を覚える若手の多くは伝統的な「思想史」に回帰しているという印象を受けます。

例えば、小社の著訳者を挙げてみると、それぞれ渋沢・クローデル賞、サントリー学芸賞を受賞された伊達聖伸さん、髙山裕二さんがいます。お二人の労作『ライシテ、道徳、宗教学』(勁草書房)、『トクヴィルの憂鬱』(白水社)は現代に強い関心を持ちながらそれを直接論じるのではなく、あくまで対象となる時代や思想に内在しながらそこから考えていくというスタイルを重視してい

ます。

ここで想起するのは「古典を読み、古典から学ぶことの意味は――すくなくも意味の一つは、自分自身を現代から隔離することにある」とした戦後思想史の大家の言葉です（丸山眞男『「文明論之概略」を読む』上、岩波新書）。丸山はこの隔離自体を「積極的な努力」と評価し、現代の全体像を「距離を置いて」観察する目を養うために「現代流行していない古典」「不評判なテーマに関わる古典」を勧めています。

あえて「不評判な」古典を

こうしてまずチャレンジしてみたのがオーギュスト・コントであり、アルベール・マチエでした。それぞれ現代からはまったく忘れられた思想家と言っていいと思います。

十九世紀フランスで活躍したコントは「実証主義」「社会学」の祖として一般には知られていますが、実証主義を宗教にまで高めようと、最終的に自ら「人類教」という宗教を創始してその指導者となった変人です。日本でこれまでコントと本当にまともに向き合った著作は清水幾太郎『オーギュスト・コント』（岩波新書）くらいで、まさに「不評判」の古典と言えます。

ただ、科学者の在り方をフランス革命前の「司祭」に見たコントの視線は、科学と社会が亀裂を深める震災以後、妙に迫るものがあります。本邦初訳・新訳で贈るコント・コレクション全二巻、『ソシオロジーの起源へ』（杉本隆司訳・市野川容孝解説）、『科学＝宗教という地平』（杉本隆司訳・解説）には、そんな思いがあります。

フランス革命期に繰り広げられた異様な「革命祭典」に注目したマチエ『革命宗教の起源』（杉本隆司訳・伊達聖伸解説）も同様です。二十世紀初頭、「儀礼と教義は社会の産物」としたデュルケム社会学に基づくその革命史学は今日からすると何か不気味さが漂いますが、昨今の空虚な「絆」の称揚と比べると、濃密な祭典描写には生々しいリアルさすら覚えます。

「不評判」を強調してみましたが、コントやマチエを熱っぽく論じた清水幾太郎が最近になって忘却の淵から召還されている事実もあります。震災後、『流言蜚語』『愛国心』（いずれもちくま学芸文庫）といった名著が相次い

で復刊され、評伝も出ました(竹内洋『メディアと知識人』中央公論新社)。清水を「和製コント」だなどと言うつもりはありませんが、危険すら感じるこうした思想への回路が新たに拓かれているのかもしれません。

「分かりにくい」のが古典?

先日、半世紀ほど前に刊行された文学作品の翻訳を一読して、間髪入れずに「分かりにくい」と感じた自分にハッとしました。この「分かりにくさ」は、網野さんが指摘した「品なく読みづらい」といった事態とは異なり、むしろ古典のかけがえのない条件のように思えます。

ある時期以降、新訳が古典を刊行する前提になりました(「超訳」というのも最近はあります)。もちろん、一冊一冊「分かりやすさ」を追求していくのは当然のことです。これまで触れてきたように、この叢書でも本邦初訳・新訳は大きな柱に位置付けられています。

それでも、「分かりにくい」のが古典という事実に変わりはありませんし、それが変わったら大変なことだと思います。新訳・図版追加といった編集面での工夫や電子書籍化をはじめとした媒体自体の検討など改善策は出尽くした感があります。白水・iクラシックスの刊行開始から一年余り。編集サイドとしても辛抱強く古典に向き合っていきたいと改めて感じます。

竹園　公一朗(たけその・こういちろう)

人文書と平凡社ライブラリー

保科孝夫（平凡社編集一部）

平凡社ライブラリーは、二〇年まえ、一九九三年の創刊である。つまり、講談社学術文庫にはもちろんのことながら、岩波書店の今は亡き同時代ライブラリーや筑摩書房の学芸文庫の創刊より少し遅れる。少し遅れたということが、このシリーズの性格に大きくかかわっている。

講談社学術文庫が先行しているなかで、同時代ライブラリーやちくま学芸文庫が刊行を始めた機運について、ざっくり言ってみると、半分学術書で半分啓蒙書のような、いわゆる読書人を当てにして出していた二〇〇〇円台の人文書の売れ行きが落ち込んできた状況があり、学生さんはもう一〇〇〇円台の前半までなくては買いませんよ、という声を耳にする機会が増え、けれどもかつては自分たちも読んだような定番の良書というものはやっぱりあるのだとまだ信じていて、だったら、ソフトカバーで文庫みたいにハンディなシリーズをつくって、そこに今まで売れてきた（あるいは、かつて売れた）半分啓蒙書的な良書を入れこめば、文春や新潮の文庫みたいな値段は付けられないけれど、一〇〇〇円近い、または一〇〇〇円を少し超えても、きっと「学生さん」や「読書人」が買ってくれて、落ち込みをカヴァーしてくれるにちがいない、というような気分だったのではないか、と幾分は記憶にもとづき、かなりは推測によって思う。ちょっと不正確かもしれない。だれかあとで間違いを正してもらいたい。

幻想の「学生さん」や「読書人」を当てにしたスタートであり、たぶんかなり購買者の実態とずれていきつつあったのだと思うが、それでも、こういうシリーズを買ってくれる読者はいた。世の中の思潮が、文字を媒介

にして動く時代であり、その文字を載せる媒体として本が決定的な役割をもっていたわけだから、こういうシリーズがこの時期に相次いで創刊されたことには、じつに大きな意義があり、いつか誰かがその歴史を書くことになるだろうと思う。こういうシリーズで出された個々の本が、微細であれ、学問や思想の展開に関与したことは間違いない。

例えばちくま学芸文庫で出されたハンナ・アーレントやカール・シュミットの幾冊かの本は、これらの思想家が六〇年代や七〇年代に翻訳され読まれ、それからしばらくおおかたにとっては忘れられていたあと、再び買われ読まれ、政治や社会やについて議論する際に、これは基本的な文献なんですよ、という顔をいまや獲得した、その基盤として大きく働いた。それは、政治学や政治哲学にとって、また広く全体主義を経験した二十世紀と地続きの現在を考えるに際して、そんなに小さなことではないと思う。欧米でのアーレント熱、シュミット熱がこれにはもちろん影響しているだろうが、六〇年代・七〇年代にたとえばアーレントを発見し読みこみ、フランス由来の「現代思想」の覇権の中でも揺らぐことなくその意義を認めてきたような見識が、アーレントにかぎらずとくにドイツ語圏からの思想や言説を並べた学芸文庫の初期のラインナップには、うらやましいことに見てとれるように思う。

そうした見識があるかどうかはさておき、平凡社ライブラリーも、学術文庫や同時代ライブラリーの驥尾に付して、前世紀九三年六月に刊行を開始した。遅れたにもかかわらず始めたのには、防衛的な意味もあった。このままこうしたシリーズをもたないでいては、自社の「良書」が早晩、他社の学術的なペーパーバックのシリーズに引き抜かれていってしまう、これまで文庫は出してきたことがなく、そのノウハウをそなえてはいないけれども、ここはいちばん踏みださずばなるまい、ということだっただろう。この時期以前に、平凡社は社会史のブームを牽引していた。網野善彦氏をはじめとする日本中世史の本が平凡社選書というシリーズを中心に、また阿部謹也氏や良知力氏の西洋史については社会史シリーズを中心に、たいそうな評判をとっていた。私なども平凡社に入らせていただきたいと思ったのはこういう本に魅かれていたからだった。また、アメリカを中心とする思想

史や文学研究の分野での新しい動きに注目した翻訳・出版もしていた。サイードをはじめとするこちらのまとまりも、平凡社選書や社会史シリーズとともに他社にねらわれているにちがいない、と焦慮していたのである。

もちろん、すべてを自社の持ち物で賄うわけにはいかず、他社の刊行した書目もはなから計画に入っていたのだが、最初の性格はこうした条件によってある程度まで形づくられたと思われる。サイード『オリエンタリズム』はよく売れたし、網野善彦『異形の王権』もよく読まれた。が、歴史ものは、堅調ではあったが、期待ほど好調ではなかった。他社の学術系文庫と対抗する特色として、日本関係の歴史、文学研究ジャンルの書目の充実を私などは考えていたが、超優良な売れ行き路線にはとおかった。マルクス主義はもっとも寒い時期を迎えつつあったが、それでも、めんどくさい史料や古典の読解を含む歴史や文学の具体的でジグザグした議論よりも、思想や哲学のテーゼのほうがお好みのなのか、断言命題がお好きなのはマルクス老人(かつての青年)といっしょじゃん、と毒づいたりした。平凡社ライブラリーも、たくさん思想・哲学関係を出してはいたのだが。

しかしこれは、間違ってもいただろう。なぜか岩波同時代ライブラリーをお友達に選んで、同じ判型にして、ぼくたち二人だけかもしれないけれど、すえながく仲良くしようね、とすり寄ったにもかかわらず、そんな声などまるで聞こえなかったようにすぐに別のジャケットを着て「現代文庫」とか名乗りをかえられてしまったあとは、平凡社ライブラリーは孤独な種族になってしまった。同じ進化系統の仲間がすべて絶えた種のように、たいへん特殊な環境を、つまり棚の高さを、要求することになってしまった。その制約は、たとえばたくさん売って、文春文庫を駆逐してその後釜に座るなどという大志を不可能にしてしまったのである。文庫のようにいくつも刊行したうちの一つが大ベストセラーに化けるというようなことを期待するのではなく、どの書目もいい本で、爆発的でなくていいので堅調に売れて、書店さんにも信頼されて、少しずつ自らの環境を整えられるように力をつけていこう、そのためには、もともと少し他より高い定価も利用して、文庫と選書の真ん中くらいに位置を定め、だからすでにある本をこのシリーズに直すだけではなくて、オリジナルのものも入れていこう、特定のジャンル

に凝り固まることはやめて、いい本だったら入れていこう、だけど大受けを狙ってラインナップを乱すことはやめておこう、云々とだんだん心をいれかえていったのである。

学術系文庫にはあまりないジャンルもいくつか試した。これは早くからではあったが、山関係がそれであり、釣り関係がそれに次いだ。外部の目利きスタッフの協力も得て、山・釣り関係のラインナップは、その世界では平凡社ライブラリーの名を一躍高からしめた。

また、もともと平凡社の書目にあった「セレクション」という手法を活用するようになった。『ヴィトゲンシュタイン・セレクション』や『フッサール・セレクション』はもともとあったものをライブラリー化したものだが、その伝で『ヴァレリー・セレクション』を編んだり、丸山眞男や藤田省三、廣松渉や大森荘蔵のベスト・セレクションをオリジナル編集したりした。

もちろん新編集というのは哲学・思想関係だけではない。東雅夫編『おばけずき』『百鬼園百物語』は、前者は泉鏡花の、後者は内田百閒の、怪異な掌編のアンソロジーだ。

最初期のラインナップのひとつ『愛鳥自伝』がそうだったのだが、もともとは雑誌に発表されただけで単行本になっていないものを平凡社ライブラリーでまとめ、一冊の本の形ではこれが初お目見えというものも、このシリーズにはある。最近の藤森節子『少女たちの植民地——関東州の記憶から』もそれである。小さな雑誌に連載した文章を換骨奪胎して大きく加筆もして編んだ、植民地の記憶の本である。こうした書目は、元本の声価をうしろだてにしていないわけだから、文庫的シリーズの一冊としては冒険だが、平凡社ライブラリーの棚のところに、オリジナルの書目を目当てに来てくれる人が増えれば、と期待している。

小説など文学作品もねらいジャンルのひとつである。日本の小説はうまくいっていないが、前代の編集長の企画で、マイナー文学系のラインナップも次第に評価を高めている。フェルナンド・ペソア『新編 不穏の書、断章』はスマッシュ・ヒットだったし、チャヤーノフ『農民ユートピア国旅行記』はオーウェルより早い『一九八四年』で、極度に問題的だ。

小説のアンソロジーもある。『ゲイ短編小説集』『女た

ちの時間――レズビアン短編小説集』がお勧めである。すでに読まれていたり読まれていなかったりする作品を新しい切り口で、つまり新しい読みの提案をしつつ、読者に提供する試みは、編集者としても楽しい。

提案するのは古い言説の読み直し、というのが平凡社ライブラリーの中心線であることはもちろんである。マルクス『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』はよく読まれている。『共産主義宣言』もこの夏よく出ている。マルクス主義が退潮した後で、けれども現在について批判的な言説、現在を批判的に考え直すために手がかりとなるような言説が、いま、以前よりも少しずつ多く求められてきているような気がする。マルクス一色になってしまう前の社会批判の思考、たとえば以前に出した『プルードン・セレクション』のような書目を、平凡社にもとからある財産の蔵出しも含めて、出せていけたらと思う。そういうとき、たとえば十九世紀の社会主義文献をよく読むためには、歴史や古典のセンスも必要なので、そちら方面の本の需要も増えていくとよいのではないか、きっと増えていくのではないかと期待している。購読者としての典型的な「読書人」や「学生さん」は霧に映る影のようになってしまったが、なかなかアガリになれないおばあさん・おじいさん、かつてのオタクの位置を占めそうな「変り者」の学生さんたちが、読者としてちゃんといてくれ、そういう読者に私は期待している。

保科　孝夫（ほしな・たかお）

東京女子大学図書館における学習支援の取組と丸山眞男文庫

橋本春美

一　文部科学省のGPに選定された大学図書館の取組

大学関係者には広く知られていますが、文部科学省が実施している大学教育改革支援の一つに「GP」(『Good Practice』、『優れた取組』)と呼ばれる事業があります。GP事業は二〇〇三年度から始まり、東京女子大学は初年度に「特色GP」、二〇〇四年度と二〇〇七年度に「現代GP」に選定され、本稿で紹介する図書館のプログラム「マイライフ・マイライブラリー」(学生の社会的成長を支援する滞在型図書館プログラム)は二〇〇七年九月に「学生支援GP＝新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」に選定されたものです。

「マイライフ・マイライブラリー」は従来の資料・情報提供という図書館の機能を超え、他部署との連携をはかりながら、学生の社会的成長を図書館において総合的に支援することを目指してスタートしました。二〇〇七年十一月から事業を開始し、プログラム実施のためのフロア改修が終わった二〇〇八年四月から本格的に稼動して六年近くが経過しました。文部科学省の補助期間は二〇一〇年度で終了しましたが、自己点検・評価や外部評価を実施した上で、二〇一一年度からは大学の経常的な事業として充実・発展をはかっています。

二　「マイライフ・マイライブラリー」の概要

東京女子大学は一九一八(大正七)年の創立当初より、

女子に対してキリスト教を基盤とした高度なリベラル・アーツ教育を行ってきた女子大学で、現在は一学部四学科十二専攻、大学院二研究科を有し、学生数は約四千名の中規模大学です。図書館は一館で、地下一階、地上三階建てで蔵書は約五十万冊となっています。

「マイライフ・マイライブラリー」は、図書館を、学生一人ひとりの潜在的な生きる力を引き出し(＝マイライフ支援)、活気に満ちた知的探求の拠点となる「滞在型図書館」＝「マイライブラリー」に発展させ、学習支援のために学生アシスタントを積極的に活用する「学生協働サポート体制」を整備するプログラムで、ハード面では「多様な学生ニーズに対応した空間」、ソフト面では「多様な学生ニーズに対応した『学生協働サポート体制』」という大きな二本の柱からなっています。

(一)多様な学生ニーズに対応した空間

二〇〇七年度末に行った改修は一階を中心に行われ、次のような多様なスペースを有した新たなフロア構成の図書館に生まれ変わりました。

【一階】

①メディアスペース

デスクトップパソコンが五十台設置され、図書館のデジタルコンテンツの利用やインターネット検索ができます。さらにワード、エクセル、パワーポイントが装備されているため、学生はレポート作成、プレゼンテーション資料の準備等も行うことができます。

②AVブース

メディアスペースの一角に四ブースあり、各ブースは三人まで一緒に視聴覚資料を視聴できます。

③コミュニケーション・オープンスペース

会話が自由にできるため、主としてグループ学習の場として利用されています。貸出用のノートパソコン(計二十二台)を利用し、メディアスペースと同じ環境でレポート作成等を行うこともできます。

④プレゼンテーションルーム

ガラス張りのプレゼンテーション用の部屋で、図書館の情報検索ガイダンス、基本的なレポートの書き方ガイダンスに利用する他、ゼミ発表等の

コミュニケーション・オープンスペースでレポート作成などをする学生たち

授業での利用や、キャリア・センターによる就職活動支援のセミナーや研修にも活用されています。

⑤グループ閲覧室

もともと三階に三室ありましたが、グループ学習の増加により数が足りない状況でした。このため、一階の館長室や応接室を転用して三室を追加しました。一階の三室は遮音性が高く図書資料を利用した密度の高いグループ学習に利用でき、貸出用のノートパソコンの利用も可能です。

⑥リフレッシュルーム

学習・研究から一息入れることができる飲食可能なスペースです。ここでも貸出用のノートパソコンの利用が可能なため、グループ学習や読書等に利用されています。

【二階】

⑦個人ブース

八室あり、一人で集中して学習するのに最適なスペースです。貸出用のノートパソコンも利用できます。

このように一階を中心とする新しいタイプの多様なスペースにおいては、従来からの図書館資料（＝紙媒体の情報）とパソコンを利用したデジタル情報がシームレスに利用できる環境が整い、学生の学習環境が格段に向上しました。さらに、一階の新しいタイプのスペースはすべて会話可能ですが、個人ブースも含めた二階と三階、地階は従来通りの静かな図書館の環境が維持されています。会話・非会話がフロアでゾーニングできたことにより、図書館全体がメリハリのある学習環境となっています。

（二）多様な学生ニーズに対応した「学生協働サポート体制」

学生協働サポート体制は、学生アシスタントが利用者の学生を身近な立場で支援するもので、学生アシスタント自身も「支援される立場」から「支援する立場」に変わるという経験を通して、成長がはかられることを目指しています。学生アシスタントには次の四種類があり、それぞれメーリングリストを立ち上げて日々の活動報告をして、情報の共有や意見交換を行っています。次の各名称の下の括弧内は、二〇一三年度前期の学生アシスタントの人数で、ここ数年は前・後期それぞれ八十名以上が館内で活動を行っています。

①ボランティア・スタッフ（三十四名）

自身も利用者として館内で過ごしながら、他の学生の求めに応じて、利用方法等についての質問に対応しています。ボランティア・スタッフであることを利用者に認識してもらうため、目印となる名札や腕章をつけ、机上にバルーンを置いて館内の優先席付近で過ごします。ボランティア活動に前向きに取り組んでいる学生が多く、質問への対応がない場合でも、活動しているフロアを見回って、館内の様子や利用者の状況を積極的にメーリングリストへ投稿してきます。

②サポーター（三十二名）

配本・書架整備などの業務を行う学生アルバイトで、業務の傍ら他の学生からの質問にも対応します。応募者が非常に多いアシスタントで、三倍の倍率になることもあります。職員のいるカウンターは一階にしかないため、二階、三階、地階の書架で活動しているサポーターは

利用者にとっての利便性が高く、質問される機会も多くなっています。赤いエプロンが目印となっています。

サポーターのメーリングリストでは、利用者対応以外に配架間違いの修正報告、書架の乱れ状況の報告等も日々投稿され、その都度カウンター担当者が対応を行っています。

③システム・サポーター（十五名）

アシスタント・アイランドで待機し、メディアスペース等におけるパソコン利用者への操作説明や、機器のトラブル対応を行います。また、支援が必要な利用者に適宜対応できるよう、メディアスペース等を定期的に巡回しています。日々の質問とそれへの回答、説明したスキル等について、詳細にメーリングリストに投稿し合うため、互いにスキルアップをはかることが可能となっています。

④学習コンシェルジェ（六名）

アシスタント・アイランドで待機し、学部学生の学習を支援する大学院学生のアシスタントです。資料の探し方、レポート・論文作成などについての、一般的で基本的な質問等に答えます。卒論についての相談にも対応しますが、相談者自身の考えの整理や問題解決の手がかりへ導くよう支援する範囲内でのアドバイスを行い、終了後は相談者の指導教員に相談内容についての報告を行うこととなっています。

学生協働サポート体制は決して階層的なものではありません。学習コンシェルジェは大学院学生限定ですが、その他のアシスタントはどれから始めても構いません。しかし、当初見込んでいた通り、ボランティア・スタッフ経験者がサポーターに応募するなど、ステップアップ的な動きも見られるのは事実です。また、学部の一年次学生と大学院博士後期課程の三年次学生とでは十歳近い年齢差があり、ロールモデルとなり得ることを期待していたところ、実際に最近の学習コンシェルジェ応募者の中には「自分が学部時代にお世話になったから、（大学院に進学したので）今度は自分が役に立ちたい。」、「学部時代に学生アシスタントをやっていた。大学院に進学したら学習コンシェルジェになりたいと思っていたので。」と

いうような動機で応募してくる例が見られるようになっています。

三　学習滞在型図書館への変化

(一)利用者数増加と滞在型利用

これまで見てきたとおり、学生の多様なニーズに合わせたフロア構成と、学生アシスタントによる学習支援を意図した学生協働サポート体制を整備したことにより、図書館利用者が大幅に増加しました。

フロア改修後の二〇〇八年度の入館者数は改修前の二〇〇七年度に比して三四・二%増と急増し、その後も増加を続け、東日本大震災後の微減等を経て、現在はほぼ五割増しとなっています。一日の入館者を見てみると七月の平日が一番多く、一日あたりの平均のべ入館者数は千七百人を超えています。これは、大学院学生を含む全学生数の約四割にあたります。

また、二〇一〇年度に実施した学生アンケートで、図書館を滞在して利用しているかという問いへの肯定的な回答は約九割に達しました。二〇一一年度からは退館状況のデータも把握できるようになっており、そのデータ分析によっても、長時間図書館内に滞在する学生、一日に何度も入館し、授業の合間を図書館で過ごす学生の実態が明らかになっています。

(二)利用目的＝館内での学習

取り組み開始後、毎年百名前後の見学者が図書館を訪れてくださいましたが、その中で、二〇〇八年度以来増加している利用者は、一階の新しいスペースでパソコンを利用しているだけではないかというような疑問を投げかけられたことがあります。その疑問には、毎年実施している学生アンケートの結果や実際に館内で学習している学生の様子から、図書館利用の目的が主として「学習」であることを理解していただいています。

学生アンケートの結果をいくつかご紹介します。

まず、二〇〇八年度以降毎年実施している年度末のアンケートで、「図書館内のスペースで一番利用する場所」をたずねたところ、一階の新しいタイプのスペースではなく、二階、三階、地階にある一般閲覧席と答えた学生が一貫して一番多くなっています。

スペース毎にその利用目的をたずねた結果を回答の多い順に列挙すると、メディアスペースは①レポート・論文作成、②課題・試験勉強、③インターネット検索、④データベース・情報検索、コミュニケーション・オープンスペースは①課題・試験勉強、②グループ学習・活動、③レポート・論文作成、④インターネット検索、リフレッシュルームは、①飲食、②課題・試験勉強、③グループ学習・活動、④読書、などとなりました。学生が各スペースのそれぞれの特徴・機能に応じてスペースを使い分けて、学習している実態が見て取れます。

実際に、学生の動きを見てみますと、休み時間には、授業が終わって図書館に来る学生たち、授業のために図書館を出て行く学生たちという二つの大きな動きがあります。入館してきた学生は、自分のニーズにより、二階等の一般閲覧室・書架に向かう、貸出用ノートパソコンを借りてコミュニケーション・オープンスペースやリフレッシュルームに行く、グループ閲覧室を申し込んで、グループで向かう、メディアスペースに直行して課題に取り組む等、様々です。

図書館資料の利用方法についても変化が見られます。前述の通り、本取組によって利用者は増加していますが、館外貸出冊数は増減を繰り返しつつも変化がない状況が続いています。学生アンケートで図書館の機能としての重要度をたずねたところ、館外貸出しと同様、あるいはそれ以上に館内での資料の利用を重要視している結果となりました。本学図書館では、書架から取り出して利用した資料は、利用した場所の返本用ブックトラックに置くこととなっていますが、書架がない一階のメディアスペースやコミュニケーション・オープンスペースに他の階の資料が多く返本されます。館内のパソコンでレポートを完成させる、発表の準備をする等が可能な環境が整い、館外に資料を持出す必要性が減っているためと思われます。

近年文部科学省が発表している答申や審議のまとめの中で、大学における図書館の機能がクローズアップされています。大学図書館に求められる機能・役割のトップに「学習支援」が挙げられ、学生の主体的な学習のベースとなる図書館の機能強化等が求められています。東京女子大学図書館の場合は、マイライフ・マイライブラ

リーの取組を通じて、学生が授業の合間を図書館に滞在して主体的に学習をする「学習滞在型図書館」が実現しています。

四　もう一つの側面＝丸山眞男文庫の存在

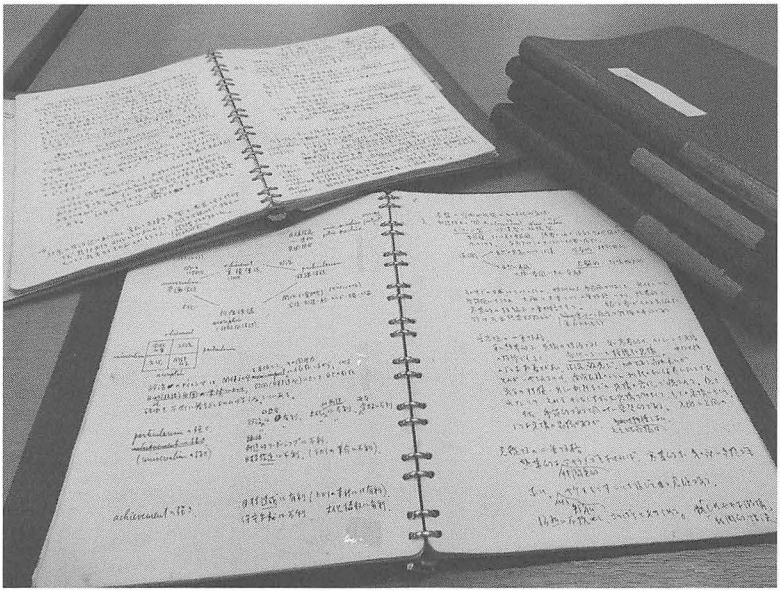
これまで東京女子大学図書館の学習支援機能を中心に述べてきましたが、大学図書館として教育面と共に研究面で教員や学生を支援するのもその大きな使命であることは言うまでもありません。他の大学図書館と同様に専門図書、学術雑誌、e-Journal、データベース等の研究用資料を整備し、研究環境の充実をはかっていますが、研究環境としての大きな特徴に「丸山眞男文庫」の存在があります。丸山眞男文庫の概要及び現在の活動状況について簡単にご紹介をさせていただき、本稿を終えたいと思います。

(一)丸山眞男文庫の成り立ち

戦後日本の代表的知識人であった丸山眞男氏の没後、一九九七年に、ご遺族から学校法人東京女子大学に丸山眞男氏が遺された膨大な図書資料類や各種草稿資料類を一括寄贈したいというお申し出をいただき、一九九八年九月に正式に寄贈されました。大学では、寄贈資料を丸山眞男文庫として図書館に一括収蔵して管理することとし、一九九九年春から図書館の地階に丸山眞男文庫室を設置しました。また、運営組織として東京女子大学比較文化研究所附置の「丸山眞男記念比較思想研究センター」を発足させ、丸山の直接の教えを受けた研究者を中心とする「丸山眞男文庫協力の会」の協力を得ながら、学内外の研究者の利用に供する態勢の整備を進めてきました。

(二)丸山眞男文庫の概要と構築のプロセス

丸山眞男文庫は、約一万八千冊の図書、約六千二百件の草稿類、約一万八千冊の雑誌等からなり、その中には、丸山自身の書きこみが多い図書約五千八百冊のほか、自筆原稿やメモなども多数含まれており、丸山の学問と思想の全体像を知ることができる構成となっています。図書館では通常の主題による図書の分類は行わず、原則として丸山家の書庫および書斎、寝室、応接間の書架にお



丸山文庫所蔵草稿類一例

ける並び順に資料番号を付して排架しました。ただし、晩年に丸山が闘病生活を送る中で書架の配列が乱れた部分については、「丸山眞男文庫協力の会」が丸山の意図を推測して配列を再現しています。

二〇〇五年に丸山の書きこみのない図書（開架）の公開を始めて以来、草稿類、丸山の書きこみのある図書（閉架）、雑誌と、順次公開を進め、現在は一部の資料（丸山の書きこみのある楽譜類、丸山への来簡類等）を除き、ほぼすべての資料の閲覧を可能としています。

これらの膨大な資料の整理と公開に向けての準備には、約十三年の歳月を要しました。「丸山眞男文庫協力の会」の諸先生方、及び若い研究者の方々が、資料の一頁一頁を、あるいは一枚一枚を丹念に調べ、整理していくという緻密かつ膨大な時間のかかる作業が必要だったからです。丸山の蔵書には丸山による多くの書きこみや線引き、折りこみが残されています。それらの書きこみ等が丸山自身のものであるかどうかの確認、書きこみの量・質的な重要度からのグレード付け等の調査が行われました。グレードは低い順に一～四までとし、二以上の図書・雑誌についてはデジタル化されました。丸山の各種草稿、

執筆メモ類、講義・演習用原稿、各種ノート、諸記録等についても、緻密な調査が行われ、大・中・小項目からなる「丸山眞男文庫草稿類分類項目」にもとづくデータベースが構築されました。

(三)丸山研究プロジェクト

現在の活動は整理の段階から調査研究の段階へ移行しています。二〇一二年度からは文部科学省の私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に採択された研究プロジェクト「二十世紀日本における知識人と教養——丸山眞男文庫デジタルアーカイブの構築と活用」を開始し、五年間にわたる計画にもとづき、現在次の二つのテーマに沿って研究を進めています。

一、二十世紀知識人の教養と学問——丸山眞男文庫を素材として

丸山文庫所蔵資料の既刊著書・論文や未公刊草稿資料類を利用し、二十世紀の知識人の教養形成過程・教養観・学問観等について多角的な研究を行う。

二、丸山眞男文庫所蔵資料の調査研究とデジタルアーカイブ構築

丸山の書きこみや折りこみのある図書・雑誌、その他、多くの楽譜類、草稿ノート類、書簡などの一次資料類の調査や研究、重要なものの翻刻や出版、デジタルアーカイブの構築を行う。

これまでも丸山眞男記念比較思想研究センターは「丸山眞男文庫協力の会」の協力を得て、未公刊草稿資料類の公開・翻刻、『丸山眞男記念比較思想研究センター報告』の刊行、講演会・読書会の開催等を行ってきましたが、今後はこの研究プロジェクトの推進により、二十世紀日本の政治思想と教養につき、これまで以上に深く広い認識を開こうとしています。このプロジェクトの具体的な到達目標について、「東京女子大学ホームページ」には次のように明記されています。「丸山をはじめとする二十世紀の知識人たちの教養形成過程及び教養観を解明します。また新渡戸稲造・南原繁・丸山らが知識人の国際的コミュニティ形成に果たした役割を明らかにし、二十一世紀における新たな知的コミュニティ形成の

方向性を探求します。同時に、丸山文庫所蔵資料をデジタルアーカイブ化し、広く日本及び世界に向かって公開します。」研究プロジェクトはこれらの目標に向かって、研究活動を展開していくこととなっていますが、図書館はこのプロジェクトと丸山眞男文庫の運営を様々な形で支えて行くことになります。

丸山眞男文庫、丸山眞男記念比較思想研究センター、研究プロジェクト「二十世紀日本における知識人と教養――丸山眞男文庫デジタルアーカイブの構築と活用」については、すべて東京女子大学のホームページで詳細に紹介されていますので、興味のある方は是非閲覧していただきたいと思います。

なお、丸山眞男氏の著作にかかる著作権は丸山ゆかり里夫人の御逝去の後、二〇一一年に学校法人東京女子大学に遺贈されました。

橋本　春美（はしもと・はるみ）
東京女子大学 教育研究支援部 図書館課長

2013/1/25　○人文会ニュース114号刊行
2013/2/13　□人文会主催書店研修会
19:00～21:00　テーマ：「ソーシャルネットワークを活かした人文書の棚づくり」
会場：岩波セミナールーム
講師：空犬氏／幸恵子氏（リブロ池袋本店）／北川毅氏（代官山蔦谷書店）
参加者：書店（30名）・人文会版元（30名）・その他（10名）　合計70名
2013/2/20　☆2月例会
15:00～17:00　会場：筑摩書房本社　会議室
2013/3/14　☆臨時幹事会（幹事＋副委員長）
15:30～17:30　会場：東京大学出版会　会議室
2013/3/19　☆3月例会
15:00～17:00　会場：筑摩書房本社　会議室
2013/4//12　○多摩地区書店グループ訪問
A.　中央線沿線書店訪問グループ（訪問書店：7店）　参加出版社：10社10名
B.　京王線沿線書店訪問グループ（訪問書店：7店）　参加出版社：10社10名
・懇親会（立川にてABグループ合流）　書店（8名）・人文会（20名）　合計28名
2013/4/17　☆4月例会
15:00～17:00　会場：筑摩書房本社　会議室
2013/4/30　○人文会ニュース115号刊行

（書記　新保卓夫）

店／ジュンク堂盛岡店／さわや書店フェザン店（計18店・訪問順）

■懇親会

・会場：ホテルモントレ仙台

・出席者：書店（11店舗17名）・取次店（3社9名／同行含む）／人文会（20社20名）　合計46名

・宿泊：10/17ホテルモントレ仙台　10/18ホテルルートイン盛岡

・解散：16:40　JR盛岡駅

・同行取次店：トーハン（倉根智男氏）／日販（岩﨑健太郎氏）／大阪屋（平野誠氏）

（旅行幹事　古川・根井）

2012/10/20　□石巻地区訪問　＊希望者（11名）によるオプション

・訪問書店：石巻市図書館／ヤマト屋書店TSUTAYA中里店／金港堂石巻店／未来屋書店石巻店（計4店）

2012/11/14　○大学生協事業連合会専門書（人文書）委員会懇談会

14:00～17:00　会場：大学生協会館（杉並）

出席者：大学生協＝射場氏（東京事業連合）・渡辺氏（東京事業連合）・鯉迫氏（京阪神北陸統合事業部）・小早川氏（東北大学）・秋田氏（一ツ橋大学）／人文会＝田﨑・平石・朝倉・足立（橋元代理）・新保

2012/11/21　☆11月例会

15:00～17:00　会場：筑摩書房本社　会議室

・来会者：紀伊國屋書店店売総本部書籍MD係長　吉田敏恵氏

「紀伊國屋書店うめきたグランフロント大阪店」の新規出店説明

2012/12/21　☆12月例会

15:00～17:00　会場：筑摩書房本社　会議室

・来会者：アジアの会　佐藤氏・寿南氏／丸善丸の内本店　喜田氏「フェアーについてのお願い」

2013/1/16　☆1月例会

14:00～16:00　会場：岩波セミナールーム

・来会者：ブックファースト　社長 木村繁氏／竹内淳氏／嶽山義治氏／梶野光弘氏

16:00～18:00　□調査・研修委員会主催「勉強会」

【テーマ】「大学図書館の変化～慶應義塾メディアセンターの選書・蔵書を中心に」

【講師】岡本聖氏（慶応義塾大学メディアセンター）

2013/1/25　○第36回（2013年）人文社会科学系出版五団体合同新年会

18:00開宴　会場：ホテルメトロポリタン・エドモント

・当番幹事団体：大学出版部協会

・人文会参加者（48名）

11 退任者、新担当者挨拶　（総会幹事：根井・岩野）

2012/6/13～29　○特約店グループ訪問

1. 福岡・大分コース　6/13～15
2. 北陸コース　6/13～15
3. 四国コース　6/27～29
4. 長崎・熊本・鹿児島コース　6/27～29

2012/6/20　☆6月例会

15:00～17:00　会場：筑摩書房本社　会議室

2012/7/18　☆7月例会

15:00～17:00　会場：日本出版クラブ会館　2F会議室

18:00～20:30　○人文会、歴史書懇話会、国語・国文学出版会合同懇親会（トーハン倉根さん、日販駒村さんの激励会）

会場：日本出版クラブ会館　パピルス

［参加者］

（株）トーハン　仕入企画部：倉根智男氏・小川淳氏・鈴木百合子氏（3名）

日本出版販売（株）　書籍部：駒村一雄氏・園田浩之氏・大橋功幸氏（3名）

・参加者：人文会（30名）／歴史書懇話会（15名）／国語・国文学出版会（12名）　合計63名

2012/8/22　☆臨時幹事会（幹事＋正副委員長）

16:00～17:30　会場：東京大学出版会会議室

2012/9/19　☆9月例会

15:00～17:00　会場：筑摩書房本社　会議室

・来会者：トーハン情報システム部　マネジャー　村田博高氏「TONETS i」説明

2012/9/30　○人文会ニュース113号刊行

2012/10/4　○2013年人文社会科学系5団体合同新年会打ち合わせ会

14:00～15:30　会場：東京大学出版会

出席者：大学出版部協会［当番幹事団体］（山口・橋元・木場）／歴史書懇話会（横井・角田）／国語・国文学出版会（白石）・法経会（古澤・前田）／人文会（田﨑・新保）

2012/10/17～19（2泊3日）　○研修旅行

・集合：AM8:20　JR東京駅（やまびこ53号ホーム集合）

・訪問地：福島・宮城・岩手

・訪問書店：ジュンク堂書店郡山店／西沢書店大町店／岩瀬書店中合店／ジュンク堂書店仙台本店／ジュンク堂書店TR店／丸善仙台アエル店／紀伊國屋書店仙台営業所／東北大学生協文系店／紀伊國屋書店仙台店／東北学院大学生協泉店／仙台八文字屋本店／ヤマト屋書店仙台三越店／あゆみBooksあおば通り店／金港堂／東山堂書店イオン盛岡南店／さわや書店本

2012年度（2012/5～2013/4）人文会活動報告（全般）

2012/5/18　☆第45回（2011年度）人文会総会
14:00～17:00　会場：浅草ビューホテル3F
出席者：担当者（20名）　新担当者（3名）　合計20社23名
14:00開始　17:20終了
【議事】
1　代表幹事挨拶（田﨑）
2　総会議長選出（新保）
3　2011年度活動報告
（ア）会活動全般（書記：新保）　（イ）会計報告（会計：平石）
4　2011年度各委員会活動報告
（ア）販売・企画委員会（委員長：橋元）　（イ）調査・研修委員会（委員長：吉武）　（ウ）広報委員会（委員長：大野）
5　会則の改廃　（なし）
6　休会・入会の承認・報告　（なし）
7　担当者変更会員社の紹介
柏書房（富澤→衣笠）／勁草書房（吉武→小笠原）／晶文社（川上→奥村）
8　役員の改選及び各委員会構成について
（ア）代表幹事選出　田﨑洋幸
（イ）選考委員選出　新保・平石・橋元・華園＋代表幹事（田﨑）
（ウ）幹事および各委員会委員長を選出
書記（新保）／会計（平石）
販売・企画委員長（朝倉）／調査・研修委員長（橋元）／広報委員長（大野）
会長の菊池明郎氏（筑摩書房）留任を承認
（エ）各委員会の構成メンバーの選任
9　各委員会メンバーの発表
■販売・企画委員会　◎朝倉 哲哉○華園 斉・三上 直樹・三橋 直也・片桐 幹夫・衣笠 真二郎
■調査・研修委員会　◎橋元 博樹○古川 真・駒谷 光彦・三澤 宏幸・片山 伸治・小笠原 勝・奥村 友彦
■広報委員会　◎大野 友寛○根井 浩一・水谷 幹夫・岩野 忠昭
《◎委員長（幹事）　○副委員長》
＊今年度より調査・研修委員会を1名増員して7名、広報委員会を1名減員して4名とした。
10　三役と各委員長挨拶

二〇一二年度（第四六回）人文会年次総会報告

書記　新保卓夫

二〇一二年度（第四六回）の人文会年次総会は、平成二十五年五月十七日、文京区「東京ドームホテル」において全会員社出席のもとに開催されました。

議事は、二〇一二年度（二〇一二年五月一日～二〇一三年四月三〇日）の活動報告（全般）から始まり、会計報告、「販売・企画」「調査・研修」「広報」の各委員会報告と続き、新年度に向けての役員改選及び各委員会所属メンバーを決定し、無事終了いたしました。

代表幹事には、昨年度に引き続き、全会一致で田﨑洋幸氏（みすず書房）が選出されました。

会計幹事は平石修氏（御茶の水書房）、書記幹事は新保卓夫（誠信書房）が選出（留任）されました。

委員会構成は昨年同様、「販売・企画」「調査・研修」「広報」の三委員会体制で会活動にあたることを確認しました。

幹事として、朝倉哲哉氏（日本評論社）販売・企画委員長（留任）、橋元博樹氏（東京大学出版会）調査・研修委員長（留任）、根井浩一氏（平凡社）広報委員長（新任）が選出されました。

会則の変更、新規入会、休会・退会はありませんでした。

また、菊池明郎氏（筑摩書房）は、今総会をもちまして会長を退任されました。

なお、担当者変更の社は以下の通りです。慶應義塾大学出版会（大野→乙子）／勁草書房（小笠原→西野）／ミネルヴァ書房（三上〈直〉→三上〈無〉）。

委員会構成の詳細は、巻末の「人文会会員名簿」をご参照ください。

委員会活動方針

販売・企画委員会

委員長　朝倉哲哉

先期に引き続き販売・企画委員会を担当いたします。昨年の活動としましてはＦＡＸなどを利用した書店様への新刊・推薦図書の案内や、大学図書館の訪問、また蔵書調査などを行いました。その活動の中で書店様を対象にあるアンケートを実施したところ、様々なご意見・アイデアを頂戴し活動の参考とさせていただきました。その反面、定期的に行っている活動をご存じないという人文書担当の方が少なくないということも分かりました。今期はひとりでも多くの書店員の皆様に我々の活動を知っていただくことも目標のひとつとし、有益で役に立つと思っていただける情報を販売会社様とも共有しながら発信してまいります。依然として厳しい状況が続きますが、各方面の皆様の協力を仰ぎながら人文書の普及に努める、というスタンスは先期から変わりありません。

また人文会は今期、四五周年という節目の年を迎えます。販売・企画委員会としましては、書店様の店頭におきまして「人文会四五周年記念フェア」を開催いただけるよう、鋭意準備を進めております。四五年間続いているこの人文会という会の活動と加盟している二〇社の出版社を、フェアを通じて多くのお客様に身近に感じていただける貴重な機会となるよう提案して参る所存です。

今期もよろしくお願いいたします。

委員会のメンバーは次の通りです。

衣笠真二郎（柏書房）
三橋直也（紀伊國屋書店）
片桐幹夫（春秋社）
○華園斉（創元社）
◎朝倉哲哉（日本評論社）
三上無久（ミネルヴァ書房）
（◎委員長／○副委員長）

調査・研修委員会

委員長　橋元博樹

昨今の取次主導の責任販売制の導入やネット書店の隆盛などといった、書籍流通の変化は、従来の人文書販売・流通のありようを大きく変えようとしているように思えます。

めまぐるしく変わる人文書流通の環境に、どのようにアプローチするのかを不断に問い続けることが、わたしたち調査・研修委員会の活動目的です。そのためには、これまでの書店様・取次様・図書館様との協働の研修会や会員社相互の情報交換と相互啓発活動を、今年も持続的に行う所存です。

とりわけ本年は創設四五年を機に書店様との研修会をよりいっそう充実させたいと思います。

人文書の読者はどこにいるのか？　人文書をどのように売るのか？　そして人文書とは何か？　四五年にわたって人文会が多くの書店人とともに議論し、実践してきた、数々の営みこそが人文書の棚を活性化させることに繋がるのであると思っているからにほかなりません。

委員会のメンバーは次の通りです。

駒谷光彦（大月書店）
西野浩文（勁草書房）
奥村友彦（晶文社）
◎橋元博樹（東京大学出版会）
○古川　真（法政大学出版局）
片山伸治（吉川弘文館）
（◎委員長／○副委員長）

広報委員会

委員長　根井浩一

第四六回総会で、広報委員会委員長の命を受けました平凡社の根井浩一です。何卒よろしくお願いいたします。さて、人文会広報委員会は人文書に関わる「今」をお伝えしていくという役割を担っています。具体的な形としては、年に三回発行の冊子『人文会ニュース』と人文会ウェブサイトの運営です。人文分野の成果の現在や流れ、人文書の販売の実際などについては、最新の学究の成果をブックガイドとともにご紹介する『一五分で読む（人文各分野）』や、人文書販売の模索と工夫を知ることができる『書店現場から』、そして公共、大学図書館さんからの『図書館レポート』などの収載によりお伝えしています。また、イベントや加盟各社の新刊情報など適宜ホームページにアップしています。さて、今期の予定として、人文会四五周年という機会を捉えこれまでの『人文会ニュース』のバックナンバーの紙面をホームページに掲載したいと考えています。私たちの出版・書店業界の激しい移り変わりが（何しろ四五年間！）過去一一〇冊余りで辿ることができます。これは意味のあることだと思います。

人文分野の書物の普及は多少大仰に言ってしまえば、新しい知見と知識の刺激を地球上の人びとに与え、この星の文化を支え続けているものだと考えます。私たち人文会、さらにその中の広報委員会は微力ではありますが弛まず努力していきたいと思います。

委員会のメンバーは次の通りです。

乙子智（慶應義塾大学出版会）
○三澤宏幸（筑摩書房）
岩野忠昭（白水社）
◎根井浩一（平凡社）
水谷幹夫（未來社）
（◎委員長／○副委員長）

二〇一三年特約店グループ訪問報告

京都・大阪・神戸方面

報告　水谷幹夫（未來社）

●期日　6月26日（水）～6月28日（金）

●参加メンバー　三橋直也（紀伊國屋書店）、新保卓夫（誠信書房）、橋元博樹（東京大学出版会）、片山伸治（吉川弘文館）、水谷幹夫（未來社）

●訪問書店　アバンティブックセンター、大垣書店イオンモールKYOTO店、大垣書店烏丸三条店・営業本部、ジュンク堂書店京都朝日会館店、ジュンク堂書店京都店、MARUZEN&ジュンク堂書店梅田店、紀伊國屋書店グランフロント大阪店、紀伊国屋書店梅田本店、ジュンク堂書店難波店、ジュンク堂書店千日前店、ジュンク堂書店大阪本店、ブックファースト梅田店、大垣書店神戸ハーバーランド店、海文堂書店、ジュンク堂書店三宮店、紀伊國屋書店神戸店、ジュンク堂書店三宮駅前店、紀伊國屋書店大阪営業部、ブックファースト本社、同志社大学生協今出川店、京都大学生協ルネ店、京都新聞社（計17書店、2大学生協、2営業所、1新聞社）

●感想　新店や改装店舗は、これにかかわる多くのひとたちにとって期待と不安が入り混じった特別のものであると同時に、店側が人文書をどう考え扱おうとしているのかが外から見えやすくもある。そしてそれは人文書というジャンルの置かれている状況を端的に表すものでもあるだろう。よって紙幅の都合もあり、今年も多くの書店を訪問させて頂いたが、このレポートは新店、改装店舗を中心に記すことにした。

今回の訪問中、新店が紀伊國屋書店グランフロント大阪店と大垣書店神戸ハーバーランド店、ジュンク堂書店京都朝日会館店の3店舗、改装店舗は同志社大学生協今出川店と京都大学生協ルネ店の2店舗だった。

新店の紀伊國屋書店グランフロント大阪店は、紀伊國

屋書店梅田本店（約900坪）とM&J梅田店（2060坪）に挟まれた巨大な産学官連携、商業施設の一角に4月下旬に開店した1060坪（書籍は940坪）の店舗だ。「いわゆる人文書というカテゴリーをなくし、プロパーのひと以外に人文書の存在を訴求することを目標に売場レイアウトをつくりました。」という言葉通り、従来の人文書というジャンルを解体、分散させることで人文書の新しい売り方を模索、提案しようとする試みが見て取れた。賛否両論あるようだが、その試みに期待したいと思う。時をほぼ同じくして4月中旬に開店した大垣書店神戸ハーバーランド店（650坪）は、積極的に人文書棚を作っているという印象はもたなかった。大垣書店のほかの店舗を見ると人文書を扱うノウハウをもっているので、館の環境からくる客層を意識してのことだと思う。ジュンク堂書店京都朝日会館店（250坪）は、先に閉店したBAL店と入れ替わるように新店オープンした。BAL店と比べると売場面積は5分の1に減っているとはいえ、人文書の充実した品揃えは再現され、人文書、専門書をメインに扱おうとしていることが良く分った。2015年に旧BAL店が新築され、MARUZENの屋号で出店するという。ジュンク堂書店京都店も含めてこれら3店舗の展開が大いに楽しみだ。

改装の同志社大生協良心館ブック&ショップは売場が60坪から140坪に増えた。人文書棚も多く、品揃えも生協定番という常備本の比率を35%前後に抑え、学部、学生に応じた独自の選書で棚を作っていた。イベントコーナーでは人文系のブックフェアを実施していて、人文書に何かを期待していることが良く分った。一方、京都大学生協ルネ店は4月の改装で売場を150坪から100坪に減らした。内観はまるでコンビニのようであった。改装開店時から教員や学生から蔵書数、品揃えについての意見、クレームが相次いだそうだ。店がもっている歴史に裏打ちされた経験知がこうもやすやすと放棄、無きものにされたことに愕然とした。ゆくゆくは全面的に見直さざるを得なくなるだろう。その後に期待したいと思う。

人文書も含めて店頭の商品は、効率化という資本から要請される考え方で計測され数値化される。総じて数値の良くない人文書というジャンルは「売れない」と判断

され、奥へ奥へと押し込められて行くのが趨勢のようだ。大学生協といえどもその例外ではない。

店頭から少し離れて流通に目を向けると、人文書に限らず取次からの見計らい配本の減少、返品率による制約などの「問題」がある。これら店頭及び流通上の「問題」は、立場、視点によって、その様相は一変する。ゆえにそれらへの対応はより一層難しいものになる。

打ち合わせのなかで「実施と検証」という言葉が何度となく出てきた。理論に基づく実施と検証を何度となく繰り返す、繰り返せる気力と知識によって、それらの地道な努力が読者に繋がっていくことを切に期待している。

今回も人文書の販売にかかわっている多くの方々にお会いすることができ、意見交換も含め、多くを見て学ぶことができました。応対してくださった方々に感謝致します。

北海道（旭川・札幌）方面

報告　岩野忠昭（白水社）

●期日　7月10日（水）～12日（金）

●参加メンバー　駒谷光彦（大月書店）、田﨑洋幸（みすず書房）、根井浩一（平凡社）、古川真（法政大学出版局）、岩野忠昭（白水社）

●訪問書店　ジュンク堂書店旭川店、コーチャンフォー旭川店、紀伊國屋書店札幌本店、MARUZEN&ジュンク堂書店札幌店、丸善札幌北一条店、三省堂書店札幌店、北海道大学生協書籍部クラーク店、コーチャンフォーミュンヘン大橋店、コーチャンフォー新川通り店

●訪問図書館　藤女子大学図書館、北海商科大学図書館、北海学園大学図書館

●感想　人文会としての北海道訪問は、2005年に人文会総会を札幌で開催したとき以来となります。同年4月、JR札幌駅前に紀伊國屋書店札幌本店が新装開店し、札幌の書店マップががらりと変わることになるきっかけの年でもありました。当時の札幌はJRタワー内に旭屋書店が北海道の一番店として売り上げを大きく伸ばしており、それに対し大通りに店舗を構えていた紀伊國屋書店が駅前に進出し、正面から勝負を挑むような構図でした。その他、大通りには丸善札幌南一条店があり、郊外にはコーチャンフォーの札幌2店目となるミュンヘン大橋店が2004年の秋にオープンしたところでした。

そして8年の月日が経過し、札幌は駅ビルにあった旭屋書店が閉店し、同じ場所に三省堂書店が開店、丸善南一条店も閉店し、すぐ近くの百貨店、丸井今井の中にMARUZEN&ジュンク堂書店が開店し、札幌市街にも千坪クラスの大型店の開店が続きました。大型書店以外に目を転じると、長年札幌市民に愛されたなにわ書房が閉店、大通りの北側には丸善札幌北一条店がオープンし、こちらも書店の競争は激しくなっていると思われます。郊外にはコーチャンフォーの3店目、新川通り店がオープンし、クルマ社会・北海道ではすっかり市民の中に定着しているようです。

さて、ここまでつらつらと札幌の書店事情を書き綴っ

てきましたのは、人文会として北海道を訪れていなかった8年の間に北海道地区の書店事情がガラッと変わってしまったということを述べたかったからであります。8年と言えばそれなりに長い時間であると言えなくもありませんが、わずか8年でここまで書店地図が塗り変わった地区がほかにあるでしょうか。つまり今回のグループ訪問は、ほぼ初めての地で、初めての書店を訪問すると言っても過言ではありませんでした。最初に訪問した旭川もその例に漏れず、老舗の冨貴堂が閉店し、ジュンク堂書店、コーチャンフォーがそれぞれオープンしていました。

さて今回の旭川・札幌両都市の書店における人文書ですが、上に挙げたような大型店は棚のスペースもあり、新刊・既刊どちらも充実の品揃えを誇っています。専門書は、在庫が豊富で品数の揃っている大型店にしか置いていないとお客様も判断されているのか、書評で取り上げられた書籍を中心に売れているようです。東京で売れたからと言って北海道でも売れるわけではない、ということもあるようですが、個々のお店の棚を拝見した限り、特に北海道ならではの品揃えや売れ筋を感じることはなく、紀伊國屋書店、ジュンク堂書店、三省堂書店いずれも都内でよく見るそれぞれのお店の雰囲気が感じられました。

逆に北海道らしさを感じたのはコーチャンフォーのような郊外店です。日本全国、地方都市へ行けばどこもそうですが、雪の深い冬を中心に普段の通勤や買い物にも自動車を使うことが多い北海道では、郊外店は休日に家族で行くレジャーランド的な役回りを担っていて、コーチャンフォーも書籍だけではなく、DVDなどの音楽・映像ソフト、文具、ファストフードを合わせた業態となっています(コーチャンフォーとは四頭立ての馬車のこと、書籍を加えたこの四者を指します)。客層もファミリー層を中心に若い世代が多く、人文書の購買層とはややずれますので、いかにして人文書売り場に誘導し、売り上げに結びつけるか、担当の方もいろいろと知恵を絞っているようです。お店の広さ、人文書売り場の面積も紀伊國屋書店やジュンク堂書店と変わらない規模ではありますが、このような立地・客層に合わせ、われわれ人文会としても提案ができればと感じました。

このようにさまざまな立地・規模の書店の方をお招き

しての勉強会は、時間も短かったこともあり、突っ込んだ議論をするまでには至りませんでしたが、実りあるものになりました。初めにも書きましたように、この数年で札幌の書店地図はずいぶんと変わりました。そのため書店間の交流がまだ少なく、多くの方はお互いに面識がなかったようです。自店では人文書について相談できる先輩が少ない、ほとんどいない状況下、書店の垣根を越えて人文書担当者どうしが知り合う機会を人文会が提供できたことは、このようなグループ訪問ならではの成果ではないでしょうか。また、ふだん北海道を営業で訪れることの少ない人文系出版社との交流の機会を作れたことは勉強会の内容以上に今後の仕事に活かされるものと期待したいところです。

各店の方に共通する悩みは、何年たっても売れる基本書とは何か、新刊書と既刊書との比率はどのくらいにすべきなのか、何を棚に残しておくべきなのか、といった人文書永遠の課題です。今回のグループ訪問をきっかけに気軽に相談、利用できる出版社が増えたと受け取ってもらえれば、そしてそれを棚作りに活かしてもらえれば、それに勝る喜びはありません。

最後に、北海道班では紀伊國屋書店札幌営業所の方の協力を得て、大学図書館の見学・訪問を旅程に組み込みました。図書館の蔵書の充実は一見すると書店の売り上げを損なうもののように感じられます。図書館に書籍を納入している書店外商部や営業部を除けば、確かにそういう一面もありますが、むしろ蔵書が充実することにより、興味を持った書籍を借りるのではなく、手元に置いておきたいという欲求が生まれる可能性が期待できます。大学図書館の蔵書が充実することで、人文書に対する需要が喚起され、中長期的には書店の売り上げも伸びる、そんな未来図が描けるのではないでしょうか。

広島・岡山・鳥取・島根方面

報告　奥村友彦（晶文社）

●期日　7月10日（水）～7月12日（金）

●参加メンバー　衣笠真二郎（柏書房）、乙子智（慶應義塾大学出版会）、片桐幹夫（春秋社）、奥村友彦（晶文社）、三澤宏幸（筑摩書房）

●訪問書店　フタバ図書ＭＥＧＡ祇園中筋店、丸善広島店、紀伊國屋書店広島店、紀伊國屋書店ゆめタウン広島店、ジュンク堂書店広島駅前店、フタバ図書ＴＥＲＡ広島府中店、紀伊國屋書店広島営業所、喜久屋書店倉敷店、紀伊國屋書店クレド岡山店、丸善岡山シンフォニービル店、ジュンク堂書店岡山店、本の学校今井ブックセンター、今井書店グループセンター店

●感想　去る7月10日から7月12日の3日間山陽・山陰地方を会員社5名で訪問して参りました。人文会としては、２０１０年10月から2年半ぶりの訪問となります。

1日目は広島の書店を訪問しました。県の施策もあり、出雲大社の式年遷宮に合わせて広島を訪れる観光客が増えているようで、市況は概ね良好なようです。

駅前の再開発が進んでおり、ジュンク堂書店広島駅前店の入っているエールエールA館の他にB館、C館が出来、それぞれに家電量販店が入るようです。丸善広島店の三丸店長にお話を伺ったところ、家電量販店と衣料品店が入ったところ売れ行きが非常に好調だそうで、以前のデパートが入居していた時に比べて新刊の初速が出るようになったそうです。これからの広島の書店の動向には期待が持てそうです。

お話を伺う中で特徴的だったのは、広島の書店の人文書担当者が人文書の中で好調なジャンルとして口を揃えて歴史、特に日本史が好調であるとお話になられていたことです。郷土史や観光客が城郭関連の書籍を買われることが多いようで、どのお店も棚が充実していました。また宗教書も、浄土真宗の仏教書や、教会が多いことからキリスト教書がよく売れているようです。

広島訪問の中で特に印象的だったのは、懇親会の席で丸善広島店の丸田さんがずっと温めていたフェアである妖怪フェアを7月にやっと開催できるとお話されたとこ

ろ、ジュンク堂広島駅前店の高下さんも開催する予定だったことが判明し、そこにフタバ図書ＭＥＧＡ祇園中筋店の松本さんが同じ時期に是非妖怪フェアを開催したいというお話をされていました。書店の枠を超えて広島の書店で何かできないかという議論をしつつ、広島の人文担当者の交流が深まったことで今回の訪問は意義深いものとなったと感じました。

２日目は紀伊國屋書店広島営業所を訪問し、松田所長のお話を伺いました。「国立大学は毎年１パーセントの予算削減により、図書購入費も減額されている。教員の図書購入費は減らしつつも、学生のための図書購入費は確保する方向で予算が組まれている」というお話が印象的でした。学生時代に良い本に出会ってもらい、将来の人文書の読者になってもらえるよう働きかけられることができるか、これは図書館外商だけでなく専門書版元の共通の課題であると感じました。

引き続き岡山に向かい、喜久屋書店倉敷店を訪問しました。平日の昼間にもかかわらず、喜久屋書店の入居するイオンモールは車で駐車場が一杯でした。その状況を象徴するかのように改装後、倉敷店は売り上げが好調だそうです。担当者の楫さんが四六判宣言を書物復権や売れ行き良好書に織り混ぜながら、フェアを再構成されているのが印象的でした。続いて岡山駅に向かい紀伊國屋書店クレド岡山店を訪問しました。この３月に４階を撤収し、売り場面積が縮小されました。また岡山駅の再開発でイオンが駅前に出来、人の流れが変わるだろうというお話を先山店長に伺いました。近隣の書店状況に与える影響も少なくないものと予想されます。続いて丸善岡山シンフォニービル店に伺いました。教育書が２２０段と教育書に力を入れているのが顕著なお店でした。３月の増床に伴い蔵書数も増えたため、閉店した京都ＢＡＬ店の棚を使っているそうです。それにより以前は平台を利用した展開でしたが、棚を利用した展開になっています。改装後、新刊の初速が出るようになったと担当の山本さんがお話になられていました。最後にジュンク堂書店岡山店に伺いました。長年大阪本店・天満橋店で人文書を担当されていた川上さんが御担当です。「まだ、赴任して間もないので……」と、謙遜されていましたが、平均客単価が赴任後顕著に上がっているそうです。今後の川上さんの手腕に期待したいです。

3日目は、増床リニューアルした本の学校今井書店に伺いました。エントランスには「歓迎人文会御一行」と有難いお言葉が張り出されていました。広い店内にはカフェスペースが併設され、ゆったりとした空間が演出されていました。その中でも特に印象的だったのは「科学と技術図書フェア」が大きく展開されていたことです。年に1回、1書店だけが展開できるフェアで、今年は本の学校が選出されたそうです。８０００冊の展開は圧巻でした。また、歴史書の導入部に民俗学が展開されていたのもとても印象的でした。広島・岡山同様歴史書が好調なようです。続いて今井書店グループセンター店に伺いました。道路が開通したことにより広島・島根間が車で1時間短縮したそうです。そのため、広島からもお客さんが来られることが多くなったそうです。また、出雲大社の式年遷宮により観光客が増加しているとのこと。出雲関係の書籍や本の学校と同様に歴史書の導入部に民俗学が展開されていました。土地柄が棚に反映されているのだと思います。

紙面の都合で書ききれませんが、訪問させていただいた3日間、書店員の皆様の日頃の努力を棚から感じさせていただきました。皆様のお役にたてるよう努力していきたいと改めて感じました。今回訪問させていただいた書店の皆様、誠にありがとうございました。

宮城・秋田・青森方面

報告　華園斉（創元社）

●期日　7月24日（水）～26日（金）

●参加メンバー　平石修（御茶の水書房）、西野浩文（勁草書房）、朝倉哲哉（日本評論社）、三上無久（ミネルヴァ書房）、華園斉（創元社）

●訪問書店　丸善仙台アエル店、ジュンク堂書店仙台本店、ジュンク堂書店仙台TR店、ヤマト屋書店仙台三越店、あゆみBOOKS仙台一番町店、あゆみBOOKS仙台青葉通り店、東北大学生協文系書籍店、蔦屋書店仙台泉店、紀伊國屋書店仙台店、ジュンク堂書店秋田店、宮脇書店秋田店、加賀谷書店本社、紀伊國屋書店弘前営業所、紀伊國屋書店弘前店、弘前大学生協SHAREA、ジュンク堂書店弘前中三店、成田本店しんまち店

●感想　今回の訪問は昨秋訪れた仙台市から始めました。仙台駅前に大きな変化は見られませんが、繁華街一番町にはあゆみBOOKSが再出店、郊外の泉地区（北部）に蔦屋書店が1100坪で出店し、新たな競争が生じています。専門書の品揃えが充実している駅前とどのような品揃えやサービスの違いを見せることが出来るのか、期待されるところです。ただ、市内には復興景気も一段落、との影が差しつつあり、今後が気になるところです。

秋田市では加賀谷書店の外商活動が目をひきますが、近年はジュンク堂書店と提携し秋田店の在庫を活用することで、商品調達の速度を上げています。また教育県秋田の図書予算の少なさに危機感を持ち、様々な活動を行っているそうです。ジュンク堂書店は出店して既に5年。最近は仏教書の棚を拡げるなど、顧客動向を掴み変化しています。宮脇書店は駅からのアクセスの良さが売り。『人文書販売の手引き』をお渡しすると、「棚づくりの参考にする」と、とても喜ばれました。

弘前市は文化の香り高い街。紀伊國屋書店弘前店は今年で開店30周年。営業所とともに地域貢献をしてきた歴史でもあります。メモリアルイヤーに着任した山田店長に新たな店づくり、棚づくりを期待します。弘前大学生協は建物の耐震工事のため一時売場縮小ですが、来春の再オープンに向けて組合員の要求に応えられる売場構想

を練る日々。昨年オープンしたジュンク堂書店弘前中三店は、地域一番の品揃えで先行する店舗を追いかけています。

青森市へは２０１０年に訪問しており、当時は「駅ビルに宮脇書店青森本店出店前夜、成田本店リニューアル」という状況だったようですが、3年を経て成田本店は健在。郷土の本コーナーの充実ぶりは地方書店の鑑です。

最後に東北を訪問したから言うのではないのですが、大震災から2年以上を経て東北の傷は癒されるどころかますます深くなるなか、私たちは新たな生き方、考え方を求められているように感じます。人文書はこうした人にこそ「沿える」もの、と信じ活動して参りたいと思います。

2泊3日17軒という駆け足の訪問で、書店様にはご迷惑をおかけしました。今後も人文書の販売に一緒に取り組みましょう。

人文会会長退任のご挨拶

筑摩書房　菊池明郎

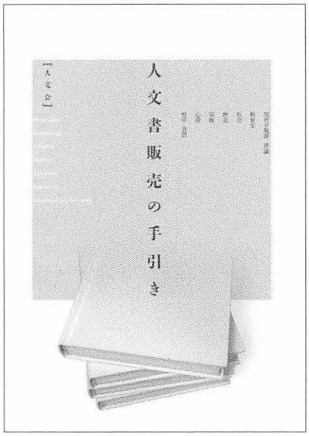
本年五月で、二〇〇七年五月以来六年間その任にありました「人文会」の会長を退任いたしました。長い間ありがとうございました。

もともと人文会創立から現在に至るまで、会長は名誉職的な存在でしかなく、代表幹事が現場の指揮を執る最高責任者でした。会長は現場の人たちが仕事をしやすくするために、何か事が起こったり、あるいは相談事が生じたときに馳せ参じるという位置づけでした。私も前代表幹事の鎌内さん（春秋社）から頼まれて、「お役に立つかどうか分からないけれども、必要なときにうまく利用してください」と申し上げてお引き受けしました。途中で田﨑さん（みすず書房）に代表幹事が交代された際も、同様の確認をして継続いたしました。しかしながら会社（筑摩書房）の代表取締役を退任（六月）するに当たって、会長を降りるべきと判断し、田﨑代表幹事にお伝えしたところ了承していただいたという次第です。

私は一九七九年五月から二〇〇〇年五月までの比較的長い期間、筑摩書房からの担当者として「人文会」の仕事をしてきました。そして一九九〇年から一〇年間代表幹事を務め、その後二年間会長に就任いたしました。合計すると三〇年間ほど人文会と関わりがあったのですが、専門書の団体としては、「人文会ニュース」あるいは「人文書販売の手引き」の発行等、書店の現場を守っている皆様のお役に立つ仕事をしてきた団体と自負しています。今後とも「人文会」をよろしくお願い申し上げます。

目　次

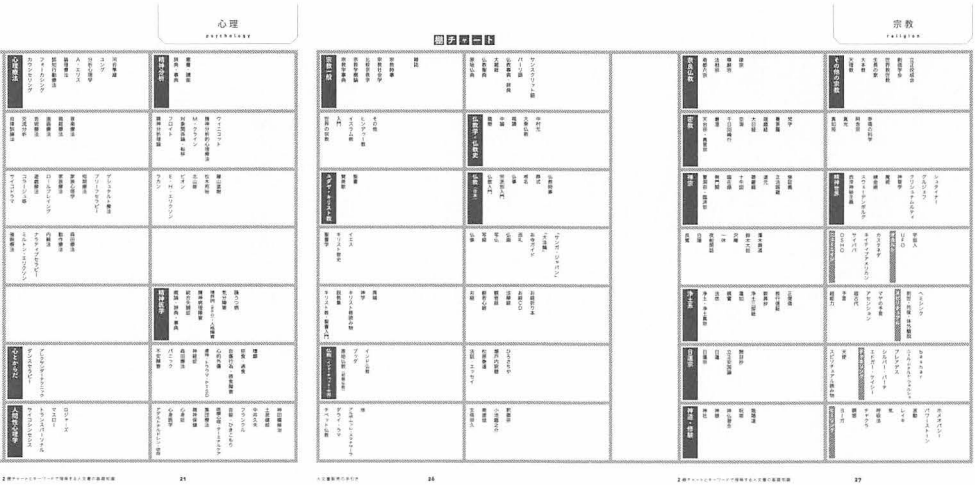
1. 専門書の仕入と棚管理
   新刊仕入／棚管理
2. 棚チャートとキーワードで理解する人文書の基礎知識
   哲学・思想／心理／宗教／歴史／社会／教育学／現代の批評・評論
3. 人文書棚づくりのためのQ&A
   受賞と人文書／人文系雑誌／定番のフェア・セット／参考図書・情報源
4. 基本図書700
   哲学・思想／心理／宗教／歴史―日本史／歴史―世界史／社会／教育学



人文会のウェブサイト上ではこの「人文書の手引き」(PDFファイル)をご覧いただけます。ぜひアクセスしてください。

http://www.jinbunkai.com/

「人文書販売の手引き」
編集・発行：人文会
B5判並製84頁　2011年10月1日発行
ISBN978-4-915735-06-6(非売品)



人文会からのお知らせ

「人文書販売の手引き」が好評をいただいています。

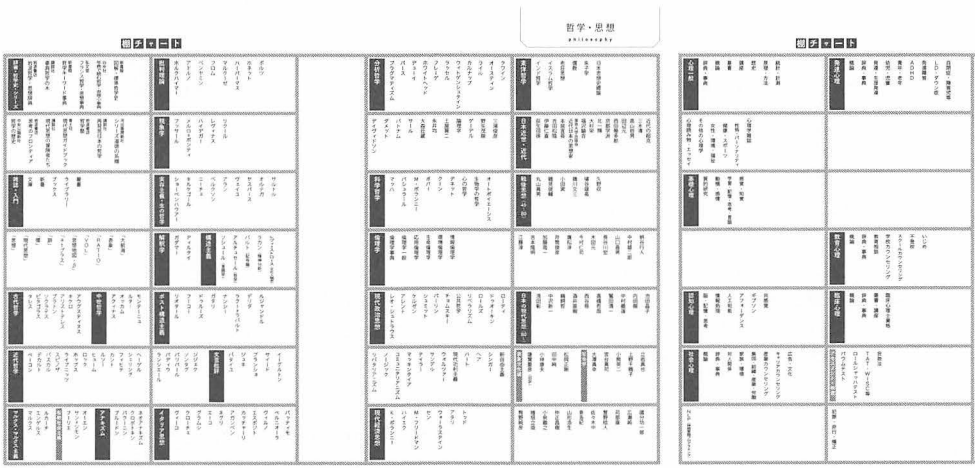
人文会では、2011年10月に「人文書販売の手引き」を刊行いたしました。

マニュアルの作成は人文会にとって長年の課題でありながら手つかずの状態になっていました。しかしながら最近、「初めて担当するジャンルが人文」という方が増えたこと、また書店員としては中堅といっていいほどのキャリアの持ち主からも教えを請われるケースが多くなったこともあり、マニュアルを作成する必要性を強く感じるようになりました。そこで2011年に、販売・企画委員会主導のもとに多くの皆様の協力を得たプロジェクトをスタートさせ、ジャンルに沿った「人文書販売の手引き」を完成させることができました。

初級者から中級者、またベテランの方にとっても販売につなげるためのヒントが詰まっていると自負しております。一人でも多くのご担当者にご使用いただくことで、店頭活性化のお役にたつことができれば幸いです。

実際の棚づくりに役立つ人文書各ジャンルの棚図面を収録。

◎品揃えに使える「基本図書700」も収載。



人文会会員名簿

〒113-0033　文京区本郷5-32-21　みすず書房内

2013年10月現在

社名	担当者	〒	住所	電話	FAX
大月書店	駒谷　光彦	113-0033	文京区本郷2-11-9	3813-4651	3813-4656
御茶の水書房	平石　修	113-0033	文京区本郷5-30-20	5684-0751	5684-0753
柏書房	衣笠真二郎	113-0033	文京区本郷2-15-13 お茶の水ウィングビル9F	3830-1891	3830-5337
紀伊國屋書店	三橋　直也	153-8504	目黒区下目黒3-7-10	6910-0519	6420-1354
慶應義塾大学出版会	乙子　智	108-8346	港区三田2-19-30	3451-6926	3454-7029
勁草書房	西野　浩文	112-0005	文京区水道2-1-1	3814-6861	3814-6854
春秋社	片桐　幹夫	101-0021	千代田区外神田2-18-6	3255-9611	3253-1384
晶文社	奥村　友彦	101-0051	千代田区神田神保町1-11	3518-4940	3518-4944
誠信書房	新保　卓夫	112-0012	文京区大塚3-20-6	3946-5666	3945-8880
創元社	華園　斉	162-0825	新宿区神楽坂4-3 煉瓦塔ビル	3269-1051	5229-7139
筑摩書房	三澤　宏幸	111-8755	台東区蔵前2-5-3	5687-2680	5687-2685
東京大学出版会	橋元　博樹	153-0041	目黒区駒場4-5-29	6407-1069	6407-1991
日本評論社	朝倉　哲哉	170-8474	豊島区南大塚3-12-4	3987-8621	3987-8590
白水社	岩野　忠昭	101-0052	千代田区神田小川町3-24	3291-7811	3291-8448
平凡社	根井　浩一	101-0051	千代田区神田神保町3-29	3230-6572	3230-6587
法政大学出版局	古川　真	102-0073	千代田区九段北3-2-3	5214-5540	5214-5542
みすず書房	田﨑　洋幸	113-0033	文京区本郷5-32-21	3814-0131	3818-6435
ミネルヴァ書房	三上　無久	101-0052	千代田区神田小川町2-4-17 大宮第一ビル6F	3296-1615	3296-1620
未來社	水谷　幹夫	112-0002	文京区小石川3-7-2	3814-5521	3814-8600
吉川弘文館	片山　伸治	113-0033	文京区本郷7-2-8	3813-9151	3812-3544

代表幹事　田﨑洋幸
会計幹事　平石　修
書記幹事　新保卓夫

（◎委員長（幹事）　○副委員長）

販売・企画委員会　◎朝倉哲哉　○華園　斉・三橋直也・片桐幹夫・衣笠真二郎・三上無久
調査・研修委員会　◎橋元博樹　○古川　真・駒谷光彦・片山伸治・西野浩文・奥村友彦
広報委員会　◎根井浩一　○三澤宏幸・水谷幹夫・岩野忠昭・乙子　智

人文会ホームページ　http://www.jinbunkai.com

出光佐三（出光興産創業者）

マルクスが日本に生まれていたら

1680円

「苦難との闘いを、次から次へと突破してきた〝海賊とよばれた男〟がここにいる」

百田尚樹氏推薦！

忽ち3刷

春秋社 東京都千代田区外神田2-18-6
☎03-3255-9611（価格は税込）
http://www.shunjusha.co.jp/

慶應義塾大学出版会
http://www.keio-up.co.jp/

井筒俊彦全集
第一巻 アラビア哲学

生誕100年記念出版『井筒俊彦全集』第一巻。井筒哲学"萌芽"の時代の著作を発表年代順に収録。詩への若き情熱が感じられる「ぴろそぴあはいこおん」、古典言語論、ロシア人論、そして初期代表著作「アラビヤ哲学」等、井筒哲学の原点をたどる。解題・索引付き。◎6,300円

シャルル・ドゴール
―民主主義の中のリーダーシップへの苦闘

渡邊啓貴 著

両世界大戦から戦後冷戦へと続く激動のヨーロッパを舞台に、「現代フランスを築いた父」ドゴールの生涯を生き生きと描く、渾身の書き下ろし。ドゴールの知られざる素顔へとせまる。◎3,360円

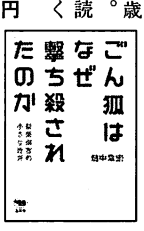
〒108-8346 東京都港区三田2-19-30【価格税込】
Tel 03-3451-3584 Fax 03-3451-3122

ごん狐はなぜ撃ち殺されたのか
――新美南吉の小さな世界

畑中章宏 著

若くして才能を発揮しながら、29歳で夭逝した童話作家・新美南吉。遺された作品群に潜む思想性を読みなおし、いまの時代を生き抜くためのヒントを見出していく。

四六判224頁・1785円



晶文社 〒101-0051 千代田区神田神保町1-11
Tel.03-3518-4940
http://www.shobunsha.co.jp

マイケル・トマセロ
橋彌和秀［訳］

ヒトはなぜ協力するのか

好評2刷

四六判上製184頁
2835円（価格税込）

協力・共感の発達と進化――。
2歳児も他者を援助し協力する。
この傾向はヒトだけのもの？
協力を可能にする「こころ」の
進化をめぐる最先端の議論。

＊価格税込

勁草書房（けいそう） TEL 03-3814-6861
FAX 03-3814-6854

〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1
http://www.keisoshobo.co.jp

ケネス・ポメランツ
スティーヴン・トピック
福田邦夫　吉田敦 訳

グローバル経済の誕生
——貿易が作り変えたこの世界

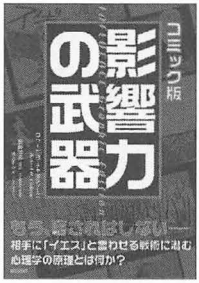
グローバル経済の網の目は、東アジアを背景に、普通の人々の営みと歴史的偶然が生み出したものだった。その誕生の歴史をひもとく。　3990円

筑摩書房　サービスセンター　☎048(651)0053
http://www.chikumashobo.co.jp/

R・チャルディーニ＝作／安藤清志＝監訳

影響力の武器
コミック版

あの話題のロングセラー『影響力の武器』のダイジェスト版が、近未来戦闘系コミックとして、ついに登場！
●A5判・1050円



誠信書房　東京都文京区大塚3-20-6
TEL.03-3946-5666〈税込〉

知の生態学的転回
〈全3巻〉完結
村田純一・佐々木正人・河野哲也・染谷昌義編

「人間環境」の多様な問題を、ジェームズ・ギブソン提唱の生態心理学の知見から探究するシリーズ。

1 身体　環境とのエンカウンター　佐々木正人編／3780円
2 技術　身体を取り囲む人工環境　村田純一編／3780円
3 倫理　人類のアフォーダンス　河野哲也編／3990円

東京大学出版会
〒153-0041　東京都目黒区駒場4-5-29
TEL 03-6407-1069 FAX 03-6407-1991
http://www.utp.or.jp/〈価格税込〉

クローズアップ **人体のしくみ図鑑**
J・クランシー著／北川玲訳
191×254ミリ　2,940円　◆想像を超える体内のかたち、色。300点超の写真を収録。

クローズアップ **自然のしくみ図鑑**
G・スパロウ著／北川玲訳
191×254ミリ　2,940円　◆人知を凌駕する自然の神々しさ、驚異の写真が満載。

ブライアン・コックス **宇宙への旅**
B・コックス他著／渡辺滋人、中里京子訳
A4判変型　3,360円　◆137億年を詩情豊かに旅するギャラクシー・ロマン。

地図で読む **ケルト世界の歴史**
I・バーンズ著／鶴岡真弓監修／桜内篤子訳
336×255ミリ　8,400円　◆124枚の歴史地図で追うケルトの始まりから現在まで。

創元社　大阪市中央区淡路町4-3-6〈税込価〉
Tel.06-6231-9010 Fax.06-6233-3111
東京支店 Tel.03-3269-1051

平凡社ライブラリー

グスタフ・ルネ・ホッケの本
種村季弘 訳

769
文学におけるマニエリスム
言語錬金術ならびに秘教的組み合わせ術

『迷宮としての世界』姉妹編。文学史の中にマニエリスムの諸相と本体を多岐にわたる視点から厖大な文学作品を渉猟して見極める決定的な書物。解説＝高山宏 2,310円(税込)

790
マグナ・グラエキア
ギリシア的南部イタリア遍歴

ホッケの旅行小説。南部イタリア、ギリシア植民市の裔の地域を遍歴し、異文化混淆の痕をそこここに残すこの地の精神史的相貌を浮き彫りに。解説＝田中純 1,575円(税込)

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-29
Tel. 03-3230-6574
Fax. 03-3230-6588
http://www.heibonsha.co.jp/ 平凡社

日本評論社

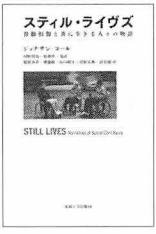
生活保護リアル 3刷!
みわ よしこ／著
本田由紀氏(東京大学教授)推薦！
増え続ける生活保護受給者。生活保護制度をやさしく解説するとともに、受給者や生活保護に係わる人々の「ありのまま」の姿を描く。 ●1470円

勉強するのは何のため？
苫野一徳／著
僕らの「答え」のつくり方
「なんで勉強しなきゃいけないの？」——この疑問に、哲学を使って「納得解」を出す！ ●1470円

〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4
TEL：03-3987-8621 http://www.nippyo.co.jp/

スティル・ライヴズ
脊髄損傷と共に生きる人々の物語
ジョナサン・コール 著
河野哲也・松葉祥一 監訳

自分の力では動かず、様々な痛みを伴う身体と共に生きる生活とは。当事者たちの語りを通して多様な生のあり方を考える。
4725円



法政大学出版局
東京都千代田区九段北3-2-3 ※価格は税込
☎ 03(5214)5540 http://www.h-up.com/

好評書

大正大震災
忘却された断層
尾原宏之[著] もうひとつの明治・大正・昭和の歴史を浮き彫りにする。 ●2100円

自民党と公務員制度改革
塙 和也[著] 政界、財界、労働界が挑んだ迷宮にせまる政治ノンフィクション。 ●1785円

「空気」の構造
日本人はなぜ決められないのか
池田信夫[著] 日本の政治と企業の「失敗の本質」をさぐる渾身の書き下ろし！ ●1680円

白水社 東京都千代田区神田小川町3-24
tel.03-3291-7811／fax.03-3291-8448
http://www.hakusuisha.co.jp/ ＊価格は税込

反ユダヤ主義／アイヒマン論争 ユダヤ論集1・2
アーレント　一九三〇年代の「反ユダヤ主義」から六〇年代アイヒマンをめぐる重要文書まで。山田・大島他訳　各六三〇円

ニューメディアの言語
マノヴィッチ　メディア史を横断しながら、デジタル転換後の視覚文化を詳細に分析。斯学の基本文献。堀潤之訳　五六〇円

化石の意味 古生物学史挿話
ラドウィック　生物の進化と絶滅、神と自然、地球の歴史、人類の誕生を描く、科学史の基本書。菅谷・風間訳　五六〇円

山と渓に遊んで
高桑信一　未知未踏の渓の踏破から、消えゆく山里の暮らしの探訪紀行へ。揺るぎない文業を重ねてきた半生記。二四〇〇円

みすず書房（税込）
東京本郷5-32-21　http://www.msz.co.jp

シリーズ［転換期を読む］

17 教育の人間学的考察
【増補新版】
ランゲフェルト著／和田修二訳／皇紀夫解説
20世紀を代表するオランダ出身の教育学者ランゲフェルトの教育論。■2940円

18 ことばへの凝視
——粟津則雄対談集
三浦雅士解説　幅広い批評を展開してきた著者の初めての対談集。■2520円

19 宿命　萩原朔太郎著／粟津則雄解説
著者の最晩年の自選アンソロジー。■2100円

20 イタリア版「マルクス主義の危機」論争
——ラブリオーラ、クローチェ、ジェンティーレ、ソレル
上村忠男監修／イタリア思想史の会編訳
「不実な」弟子たちの格闘を追う充実のアンソロジー。■3360円

21 海女の島　舳倉島［新版］
マライーニ著／牧野文子訳／岡田温司解説
舳倉島の人々の生活は「詩的」であり「偽善とタブー」から解放してくれるものだった。■1890円

※表示価格は税込
未來社　〒112-0002 東京都文京区小石川3-7-2
tel.03-3814-5521 www.miraisha.co.jp/

有山輝雄著
情報覇権と帝国日本
〈全2巻完結〉四六判／各4935円
Ⅰ 海底ケーブルと通信社の誕生
西欧列強の「帝国の道具」、国際通信網に日本は食い込めるのか。
Ⅱ 通信技術の拡大と宣伝戦
東アジアの利権獲得に向けた、帝国日本の挑戦と挫折を描く。

妖怪の通り道 俗信の想像力
常光　徹著　多様な民俗に見え隠れする俗信の姿と、そこから浮かび上がる日本人の心意とは？　A5判／4410円

吉川弘文館　東京都文京区本郷7-2
☎03-3813-9151／税込

ミネルヴァ・アーカイブズ
A5判上製カバー　＊オンデマンド版

狩野亨吉の研究
鈴木正著　知られざる巨人の全貌。12600円

象徴・神話・文化
E.カッシーラー著
D.P.ヴィリーン編　神野慧一郎他訳　8400円

ヘレニズムとオリエント
大戸千之著●歴史のなかの文化変容　10500円

明治国家の成立
大江志乃夫著●天皇制成立史研究　10500円

キタ—中之島・堂島・曽根崎・梅田
宮本又次著●風土記大阪Ⅱ　10500円

ミネルヴァ書房
〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
TEL075-581-0296　価格税込み／宅配可

2013年10月10日発行　年3回発行　第116号
発行所　人文会　みすず書房内
〒113-0033　東京都文京区本郷5-32-21
編集協力　アジール・プロダクション
印刷　中央精版印刷株式会社
〈非売品〉